
リリカルマジカルなんだってエーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

Star Dust

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルマジカルなんだってエーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

【Nコード】

N9548W

【作者名】

S t a r D u s t

【あらすじ】

リリカルなのは&TOP&TOD&TOD2のクロスストーリーっ！

神の御使いと名乗る者からデリス・エリュシオンの力で何とか逃げた先は海鳴市だった！

そして半年後、何の縁かは知らないが、この謎の潜む町、海鳴市を

魔物が襲う！

もう、神なんかいない。

Life・1 デリス・エリュシオンのキマグレは次元を越える

「あれから、もう半年かぁ……」

「そうだね……」

フリーズキールの宿屋“雪泣手”の中では、調理されたシカの肉をつまんでいる男と机に肘をついて考え事をしている女がいた。

「みんな、元気にしてるかなぁ……」

「どうだかね……」

笹原秀司。14歳。

簡単に説明すると、“名前以外の記憶が消えた人間”と言ったトコ。ダオス戦役ではクレスと共に前衛を担い、後に人々は“時空戦士”と呼ばれるようになった。

なりきり士のディオとメルとも知り合い、試練を共に乗り越えた。

まあ、何だかんだあったが、普段の平穏な日々に戻って今はこれだ。

「ロディ姉、ケチャップ取って」

「はいケチャップ」

そして、デリス・エリュシオンのキマグレに振り回されながらロデ

イ姉と旅をしている。

「じゃ、マナが溜まつたら誰かのトコに行こうか」

「うん」

彼女はロンドリーネ・E・エツフェンベルグ。オレの記憶の始まりから共にいた“姉的存在”だ。

余談だが、牛乳を1日1杯飲まなければ締まらないらしい（本人談）
そこに1人の男が現れた。

「あんたら、時空戦士のロンドリーネとシュージだろ？」

「そうだけど……」

「私はアルヴァニスタ魔物研究部の者だ。君達に頼みたいことがある」

「は、はあ……」

「ヴァルハラ平原の最奥から妙な魔物が現れて町を荒らしていくらしい。奥からは精霊をも超えるマナを常に放出しているらしい。最奥の調査の護衛をしてくれないだろうか？」

「断」 「いいよ」「ええっ!？」

いつもなら依頼とか断るハズなのに……信じらんねえ……。

「本当か!？」

「うん、本当だよ」

「ありがたい!明日の早朝、使いの者を来させる。明日はよろしく頼もう」

男は宿屋を出て寒空に消えていった。

次の日のヴァルハラ平原。

「で、何で引き受けたんだよ?」

調査隊の人間もいる目の前で聞いてみた。

「何が?」

「この依頼だよ」

「ああ、アレ?」

周りの魔物もほとんどいなくて暇な今のうちに聞いておく。

「精霊以上のマナを常に放出する相手を狩ればマナもかなり溜まるし、それに――」

「それに?」

「——面白そうだったから？」

……聞いたオレがバカだった。

「マナの溜まり方が凄い……！近くにいるよ！」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！」

「って近っ！」

鳥のような翼を持つ巨大な獣が現れた。

「グラシャボラスかつ！」

「みんな構えてっ！」

個々に武器をを構える。

「行くぞっ！」

そして、グラシャボラスに斬りかかった。

「ハアッハアッ……」

「ふう……」

「っ、強かった……」

調査隊の人間は疲れを愚痴りながら座り込んだ。

「——！？」

「どしたの？」

「みんな気をつけて！マナの濃度が上がってきてるよ！」

「はあっ！？」

そうオレが声を上げると、目の前が光に包まれて中から1人の女が現れた。

「笹原秀司だな？」

「誰だ、アンタ」

「私の名はエルレイン。世界を救う大いなる神の御使い」

彼女は一呼吸入れた後、本来の目的とは別の事を口にする。

「貴様の様なイレギュラーは危険と見た。よって——死んでもらう」

「——はっ？」

いきなり何を言っただこのババアは。

「デルタレイ」

三本の光の槍がオレを襲う。

「そおい！」

三本の光の槍を軽々回避し、エルレインに突っ込む。

「愚かな……」

「なっ！？」

エルレインの足元から出たのは何かの魔方阵のようなもの。

「力が……入らねえっ……！」

衰弱。

彼女の作り出した魔方阵には衰弱させる効果があった。

「死ね」

「——っ！？」

太く大きな槍が背中に刺さる。

「しゅー！」

ロディ姉が後ろから抱き抱えてくれた。

「デリス・エリュシオンが！？」

「な、なんだってエーっ！？」

衰弱しているハズなのにここまで叫べるオレにビックリだ。

「みんな逃げて！コイツ、勝てる相手じゃないよ！」

「た、退却だ！退却！」

ロディ姉が叫ぶと調査隊は1人、また1人とも来た道に戻っていく。

「じゃあね、白い服のお姉さん」

「ダオスめ……死して尚、私の邪魔を……」

アイツ、今、ダオスって――

その言葉を考えながら、転移の光に吞まれた。

Life・2 剣が喋ったアアアアッ！

あれから、半年が経った。

「はっ！やっ！」

毎朝の習慣、木刀の素振りをしている。

今日は場所を変えて丘の麓にしている。

「これくらいかな」

木刀を袋にしまって近くのベンチに座り込むと、自販機で買ったリンゴジュースを一気に飲み干した。

「あー、ウマイ」

一汗流した後の果汁3%濃縮還元リンゴジュースはまた格別にウマイ。って何言ってんだオレは？

空きカンを投げてゴミ箱に入れる。ナイスシュート。

その瞬間、周りを光が包んだ。

「な、何だっただんだ……？」

丘の方から何やら声が聞こえてきた。

なんとなく気になったからなんとなく耳を傾けたら、とんでも

ないことが聞こえた。

【なんなのよあのアマ！どうせもうすぐアラサーの癖に神の御使いだの何だの、調子くれてんじゃないわよ！】

……正直、聞かなかった方が良かったのかもしれない。

「つか、誰？さっきまでいなかったのに」

【声が聞こえるの！？なら丘のてっぺんに来て！】

何か地雷を踏んだ気がするぞ……。

まあ呼ばれていけないのは礼儀としてアレなので行ってみることに。

そこで見たのは――

「――剣？」

一本の紫と黄土色で配色されたサーベルが刺さってた。

【そう、それが私よ】

「へっっ………っ て剣が喋ったアアアアッ！」

【――で、落ち着いた？】

「な、何とか……」

喋る剣なんて普通、存在しないのでビビってしまった。

【私はウォラス・ハミルトン。この剣、ソーディアン・ウォラスの元となった人格よ】

おしとやかな、いかにも大人という感じの声だ。

【あなた、名前は？】

「オレは笹原秀司だよ」

【というかいつまで刺してるつもり！？】

「す、すみませんでしたっ！」

慌てて剣を地面から抜く。

なにこの剣、スッゲエコワインだけど。だって、いきなり怒ってるんだぜ？あり得ないくらい強い勢いで。

【じゃ、掲げて】

言われた通り、剣を掲げてみる。

【お前の名はって言って】

凄くハメられてる気がするぞ……。

「お前の名は——」

【そこで私の名前言いなさい】

「ウォリス！」

【ウォラスよ！

まあいいわ、契約は終わったし】

は？契約？

【そうよ。これからあなたが私のマスター。よろしくね、秀司】

「はいいいいっ！？」

「で、この剣どうしたの？」

時も過ぎて、バイトから帰ってきて晩飯を食ってる時、壁に立て掛けておいたウォリスについてロディ姉に聞かれた。

「丘に刺さってたのを拾ってきたんだ」

【ウォラスよ、よろしく】

「よろしく」

あれ、驚かない？

「驚かないの？」

「喋るなら剣の形してても人間。それを驚くのはシツレイってもの

だと私は思うな」

「そっか……」

それもそうだよな……。

「ウォラス、驚いたりしてごめん。ウォラスも、人間なんだよね」

【気にしないで。普通は剣は喋らないもの。驚いて当然だわ】

ウォラスは優しく囁いてくれた。

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ」

ウォリスは怒らせたらコワイが、優しい一面もあるようだ。

「明日は初めての学校だし、そろそろ部屋に入るよ」

明日から“聖祥学園中等部”とかいうところに転入するらしい。

ロディ姉も2ヶ月程前から生活が安定する以上の給料をもらえる喫茶店に勤め始めた。それのおかげで学校に行くハメになったのだ。

若干面倒くさいが、せっかくロディ姉が金を出してくれたので行ってみることに。

「じゃ、お休み」

明日から、波乱の1日が始まる。

Life・3 転校初日は地獄の連鎖

「ねえ、フェイトちゃん」

「どうしたのなの？」

「今日から転校生が来るんだってね」

「そうなんだ」

朝からクラスではこの話で持ちきりのようです。

「なんや？朝から転校生の話で盛り上がってんなあ」

「まあ、この時期に転校生って珍しいもんね」

「そうねえ、どんなヤツなのかしら？」

はやてちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんも若干気になっているようです。

「私のカンだと、男だったらロクでもない奴ね」

「アリサちゃん、会う前から決めつけるのはやめておいた方が……」

アリサちゃんが思った所を素直に言ったのをすずかちゃんが抑えます。

「大体、男っていう生き物はロクでもない奴ばかりよ！」

「あ、あはは……」

アリサちゃんは考えに素直過ぎるので、最近はずかちゃんやフェイトちゃん、それに加えて私でも止められません。

「そうやね。下心剥き出しで接してくる人も少くないし」

「『下心剥き出し』ははやてもでしょ？」

「お堅いなあ〜フェイトちゃんは」

「はやてが軽すぎるだけですっ！」

フェイトちゃんも何故か今回はノリノリです。

「でもフェイトちゃん、よく考えてみ？今までに何回コクられたん？」

「えっと……32回、くらいかな？」

「って告白されすぎなのっ！」

すかさず私もツツコミに回ります。

「というかそんなに告白されてたんだ……。原作の主役である私でも13人が限界なのに……」。

「その内、ニヤニヤしながらコクってきた奴はどれくらいいるの？」

それは聞いたかったな。どれくらいなんだろう？

「……15人くらい？」

「ってほぼ半分じゃない！」

「本当、ウチの学校は下心満載やな……」

……啞然とせざるを得ない気がするの。すずかちゃんもアゴが外れるくらいに口を開けてるし……。

「ま、それほどフェイトちゃんには色気があるって事やね」

「そうね」

「ありませんっ！」

フェイトちゃんの顔が真っ赤になっちゃいました。

アリスちゃんもはやてちゃんもすずかちゃんも笑っています。当然私も。

「みんな席つけ、ホームルーム始めるぞ」

転校生はどんな子なんだろう？楽しみだなあ……。

「みんな知ってると思うが、転校生を紹介する」

うわー、なんか無駄に緊張するなー……。

扉の向こうから色々聞こえてくる。男かな？女かな？とかどんな奴なんだ？とか。

「あー、静かに。では入ってきなさい」

遂に来たよこの瞬間。嫌に疲れるこの時。

教室の扉を開けて中に入る。

男共から大きな落胆の音が。うるさいぞ男共。オレが美人の女転校生だったら良かったのに、とさぞ思っているだろう。

「笹原秀司と言います。よろしくお願いします」

初の中学校生活は非常に味気のない挨拶から始まることになった。

初めての休み時間。

転校生に取っては恐らく苦痛でしかないだろう。なぜなら、オレもそうだから。

「どこから来たの？」

「前の学校はどうだったの？」

「……ヘルペスミー（泣）」

この通りだ。

オレはこの世界でいう聖徳太子とやらではないので、複数人の話を聞き分けて返答する、といったことは出来ない。

「ちょっと!」

そこで助け船をだしたのは濃い目の金髪の女の子。

「この子混乱してるじゃない!」

コイツは女番長か?

彼女が声を出すと瞬時にみんなが静まるのを見て思わないヤツはいないだろう。中には怯えだすヤツもいたし。

「いい? 1人ずつ!」すずかさんじゃないか!」?」っ!」?

「秀司君、おはよう」

人見知り発見っ! これでこの地獄からはオサラバだ!

「どうしてこんな所に?」

「それはこっちのセリフだよ」

「なになに? 2人はどんな関係?」

ニタニタしながら男子生徒が聞いてくる。

「いや、特に何でも……」

「月村さん、どうなの？」

こちらにもニタニタしながら聞いてくる。

気づいたらあっちもニタニタこっちもニタニタで助け船を出した張本人の金髪の子もニタニタしてた。

結果的に、地獄からオサラバどころかすすかを道連れにしてしまったのだった。

その頃、教室の端では――

「転校生の癖に俺のハーレムに手を出すとはな……」

――1人の男がいた。

「まあいい。いずれ、決着をつけてやるからな……」

男はその場を離れた。

秋。

葉が茶色に色付く今日この頃。

窓際に席の決まったオレはというと――

「……すかー」

――寝ていた。

「転校生だからって容赦しねえぞ。おい、起きろ!」

先生が頭を叩く。

「……すこー」

「コラっ!起きんかつ!」

「……アーチエ、それはカレーなんかじゃないよ」

「ふんっ!」

「あいだあっ!?!」

教科書の角で叩かれてやっと起きたのだった。

「なにするんすかつ!」

「寝るなっ!」

「寝てませんっ!」

「ならこの式を因数分解してみろっ!」

「んなもんわかるかつ！」

オレにこんなもんわかる訳がねえ！

「今日も空が青いなあ……」

前の数学で先生にこつてり絞られて満身創痍のオレは青い空を見て和む。

体育の時間。

体育館では剣を振るって戦う練習の様なものをやっていた。正直、これの存在意義があるのかどうか疑問なのだが。

「はっ！」

「やつ！」

竹刀の合わさる音が絶え間無く鳴り響く。見学は楽で良い。

「ふんっ！」

「うわっ！？」

あれ、目の前から竹刀が……。

「そりゃっ」

飛んできた竹刀を白羽取りしてしまった。

周りから歓声が聞こえる。そんなことはいいんだ。

なに取ってんだ。当たって気絶してこのあとの授業サボるんだろうが。

「これ飛ばしたヤツ、誰？」

しらゝっ。誰からも反応なしって悲しくなるよね！

「お前だろ？」

舞台から降りてソイツの前に行く。

他のヤツとは違い、ソイツは見た目がかなり異なる。

緑と茶色のオッドアイのオレンジ頭だったのが印象に残りそうだ。
イケメンすぎるし。

「何を言ってるんだい？ 僕がやるわけじゃないじゃないか」

正直に言おう。

——コイツ、胡散臭せえ……。

「オレが空みて現実逃避してたからって見てないんでも？」

「わかったわかった。これは明日の体育の中の試合で決着をつけよう」

何言ってんだこの先生。見学のヤツに竹刀を振って汗をかけと言っのかこの鬼教師め。

「だ、そうだ。先生もそう仰られているが、どうする転校生？」

「じょーとーだー」

やる気出ねえ……。

昼休み。

明日の為に、体育館に再び訪れて竹刀を握っていた。

「竹刀ねえ……」

感触が若干気になる所があるが、まあなんとかなるだろう。

「秀司君、大丈夫？」

「何が？」

すずかさんが話しかけてきた。

「山重君のことだよ」

あれ山重っていうのか。

「運動神経も勉強もずば抜けて凄いんだよ、彼」

「ま、アイツあんまり好きじゃないけどね」

「あ、さっきはありがとう。キン・パツ子さん」

助け船を出してくれた子だ。裏切ったけど。

「キン・パツ子って誰よ！私はアリサ・バニングスよ！」

「ア、アサ——なんだって？」

「アリサ・バニングスよ！」

「おーけーおーけー、アサリ・バーニングだな」

「ア・リ・サ・バ・ニ・ン・グ・ス！」

「笹原君もアリサちゃんを弄るのはその辺にしなよ？」

イジるのに制止がかかる。

「君達は確か——」

「「「うんうん」」」

「——誰だっけ」

「「「おいっ！」」」

「2つ前の席の高町なのはなのっ！」

「廊下側の最後尾の席のフェイト・テストロッサ・ハラオウンですっ！」

「教卓の目の前の八神はやてやつ！」

教卓前とかかなり哀れだと思っね、うん。

「高町さんとテストロッサさんと八神さんな。よし、覚えた」

「私の名前は？」

「アサリさんでしょ？」

「アリサよっ！」

なんて難しい名前なんだっ！

「全っ然難しくないわよっ！」

「まあまあ……」

「アリサ、落ち着いて……」

すずかさんとテストロッサさんが制止を呼び掛けるが、抑えきるに至らないようだ。

「さーて、昼飯食おうかね。時間もないし」

ビニール袋を開いて中から黄色の物体を取り出す。

「いただきます」

「……つてちよつと待てイッ！」「……」

「何さ？」

「今日のお昼ご飯、それだけ？」

高町さんが聞いてくる。

「そうだけど」

本日の昼飯は手に持っている黄色い果物、バナナオンリーだ。

「そんなのダメだよ！量も栄養も少なすぎるよ！」

「もつとまともな物食べるべきやな」

「食を怠っちゃダメだよ秀司君」

「第一、何この昼食は！食後のデザートじゃない！」

皆さん口々に言うんですね……。ひどいなあ……。人の昼飯にケチつけて。

「ひどいなあ……。バナナをバカにしてるの？」

何か空気が失せてきたのでさっさと口に詰め込んだ。

「……じちそうちま」

バナナの皮をビニール袋に詰めて、その場を立ち去った。

Life・4 味噌キユウはネ申

次の日。

「遅刻だああああっ！」

2日目から遅刻が確定となった。

8：27という、もはや絶望的な状態でも時計の針は止まってくれない。

ロディ姉は駅前の喫茶店のバイトで朝早くから夜遅く、と言っても8時くらいまでいない。働き者だな、ロディ姉って。

「行ってきますか！」

言い訳でも考えますか。

「小林」

「はい」

「笹原」

席にはいない。ただの空席のようだ。

「遅刻k「待ったああああっ！」？」

「お疲れ、笹原。どうして遅刻したんだ？」

言い訳考えながら来たんだ！これで遅刻は取り消しじゃあっ！

「横断歩道を渡ってるおばあちゃんの手助けをしたら目覚まし時計が壊れてておばあちゃんのお家まで付き添ってあげたら——」

「——日本語に再翻訳して出直してこい」

「ひどっ！？」

先生冷たっ！渾身の言い訳だったはずなのに！

教室の至るところから笑い声が聞こえる。試しに教卓前の八神さんを見てみよう。

「あはははは！ひーっ！だずげで笑いじめっ！」

腹を抱えて笑っていた。なんて失礼な人なんだ！人を笑うなんて！

「取り敢えず、お前遅刻な」

「あるうえっ？」

今日もまた、地獄が始まる。

「という訳で、席替えだ」

何故こうなった……。

1限が担任の授業だからって席替えしようなんて言ったヤツはどのバカだ？

「クジ引いて〜」

まあ良いか。今はクジ引いて良いトコゲットが最優先事項だろう。

「なんとということだ……」

まさかの教卓前。

オレオワタ〜（＾Ｏ＾）ノ

「先生、黒板見えないです」

前のオレの席には知らないクラスメイトが。

「じゃあ替わっても良いって奴いるか？」

「はいはい！います！いますよ！」

何とかアピールして変えてもらわねば……！

「わかった！わかったから静かにしろ！東山、ここで良いか？」

「構いません」

よっしゃああああっ！

東山さんマジ神っす！さっき初めて知ったけど。

周りが女？よくありがちなリア充ルートだが、なに気にすることはない。

「よろしくね、笹原君」

「今日から隣だから、わからないことあったら聞いてね。一応、私も転校生だったから」

隣や前は一応知り合い。マジ神っす東山さん。

「あゝ、うんよろしくテストロッサさんと、えゝと――」

誰だったっけ？

「――高坂さん？」

「高町だよ！高町なのは！」

あらっ？違ったっけ？

「昨日のおさらいします。酸素と水素が混ざると水ができます。式で表すところですね」

黒板には $H + O_2 \rightarrow H_2O$ と書かれる。

水素が何故Hだし。こんなイミフなモンを作ったヤツ誰だよ……。

昨日、テストロッサさんのご教授により何とか覚えたが、ものの10分ももたず忘れた。

「この式は数が釣り合ってませんね？釣り合わせるにはどうすれば良いですか？じゃあ笹原君、答えて？」

「……」

ダメだ、全っ然わっかんねえ。いざ見てみると、忘れるのに10分もかかんなかった。

「あ、あのー、大丈夫？」

「わかんないっす！」

「胸を張らないくださいね？わかんなかったらちゃんと聞くように。では——」

昨日のようなことにはならなかったことを幸運に思いたい。

「笹原君、ちゃんと家で勉強してる？」

「ざっくり行くなあテストロッサさんは」

顔を見ると超不機嫌。

休み時間ならば真っ先に土下座に洒落込むだろう。それ以前のステ
ップは跳ばしまくりだ。

「してるよ、別の意味で」

「本来の意味だったら？」

「してるよ」

「本来の意味だったら？」

「だからして」「本来の意味だったら？」……してないっす」

まさかこんなトコで無限ループとは……。

「やっぱり……」

予想してたのかよ。

「だって教科書読んでもサッパリングなんだもん」

「なら今日から家でその日やった分の教科書とノートを全部覚えて
きて。明日から毎日テストするから」

「オレオワタ」

正直に言ったらこれかよ……。

「キュウリウマー」

本日の昼食は緑の少し曲がった野菜、キュウリだ。

「あんた、また食を怠ってるでしょ」

出口の方を見るとアサリさん達がこちらに近づいてくるのがわかる。

「アサリさん達が……」

「アサリじゃなくてアリサ！いつになったら覚えるのよ！」

「ご、ごめん！オレ、人の名前覚えるの苦手なんだ……」

アリサさんにはかなり失礼なことをしているのがよくわかる。

……反省しよう。

「今日はキュウリだけ？」

すずかさんは、オレの持つキュウリをみてそう言った。

「そーだよ」

「でもお腹に溜まらないし、何より栄養が片寄っちゃっよ？」

ぐっ……テストロッサさんは痛いトコをついてきやがる。

「家族の人に作ってもらえば？」

何とか許してくれた高町さん。この人はMの素質がない限り、相手にはしたくない。

「姉さんは朝早くからバイトでいないし、オレにはそれ以外の家族はいない」

逃げることを選択。

「自分で作ろうということはないんか？」

「ない」

強いて理由を挙げるとなれば、面倒だから、といったトコか。

どちらにせよやる気はない。

「若干味に不満。次回は味噌を持参すべきだな……」

「……」「不満だったんかいっ！」「……」

味噌キュウというものに進化した途端、ネ申レベルのウマさに変化する。急ぎすぎて味噌忘れたけど。

「そこうるさいよ。味噌キュウをバカにするヤツはキウイにでもなってしまえ」

半分ほど残ったキュウリをスゴい速度で消費する。

「……」「ごちそうさま」

ビニール袋をゴミ箱に叩き入れ、竹刀を手に取った。

「アンタ、この調子で大丈夫なの？」

「大丈夫だ、問題ない」

そして迎えた本日最大のイベント。

「これより、授業を始める」

どんなイレギュラーかは知らないが、ピンク髪のポニテ剣士様（和風ber）が生徒の前に鎮座している。

「本日は、担当の高橋先生が体調を悪くされたので代理で来た。八神シグナムだ」

八神シグナムう？八神って……あの八神？

「まずは素振りだな。素振り300回！」

なんて面倒な願いなんだ。毎日ウオラスとやってるから慣れてるけどさ。

「はいっ！」

やる気出ねー……。

Life・5 先生はバトルマニア！……そりゃないわ

「そいつ！」

「あうっ！」

模擬戦ねえ……。

「元気だねえ、皆……」

体育館の端で空気になりつつあるオレは、自分から目立とうとはしない。何故なら、面倒だから。

「お前、そこで何をしている？」

オレの空気化計画が失敗に終わった。

シグナム先生がオレのに目の前に現れ仁王立ち。

「この授業何がしたいのかサッパリング」

剣なんてやつても、平穩なこのご時世、意味あることは何も身に付かないだろう。

「ふんっ！」

「うあっと！な、何するんですか八神先生！」

「剣を構えろ」

「いやオレ、平和主義なんで」

「さっさと構えろ」

「いやだからオレは平和主義」構えろ」はい……（泣」

近くに立て掛けた竹刀を手に取り構える。

「剣以外でもいい。先に一発入れたら勝ちだ」

「出来れば、やりたくなかったなあ……」

「フツ、では行くぞ！」

知的好奇心だか何かに刈られた眼でオレを見る。まるでバトルマニアじゃねーか。

「そおいつ！」

「はあっ！」

木刀が幾度もぶつかり合い、いつしか他のヤツらはこちらに注目していた。

「足元がお留守だぞ？」

「チッ」

八神先生強え……。

ウォラスさん使えるなら迷うことなくお世話になるトコだ。

「せいっ！」

「甘いっ！」

袈裟斬りで竹刀を弾かれた。

「あらっ……」

「……」

綺麗な弧を描いて地に落ちた。

周りからおくという言葉と共に拍手する。

「さっすが八神先生、強いなあ……」

「本気を出していなかっただろう？」

「そんなことキツパリ聞きます？」

質問の内容もバツサリ。先生らしいと言えば先生らしい。今日初めて会ったけど。

「剣が暴れたがっていたのを必死に抑えていたな」

「さて、どうだかな……」

——昔、色々あったのさ。

「だが、強い」

いや強くないっす。間違った語釈すな。

「テストロッサ、次はお前にでも相手してもらおうか」

「はい、シグナム……じゃなくて先生」

さらば～せんせい～

たびだ～つ人は～

たいい～くきょ～い～ん

シ～グ～ナム

即席で考えてはみたが、何とセンスのない歌なんだろうか？ 作詞者
作曲者歌手の方に失礼だ。なんかスンマセン。

とりあえず八神先生はテストロッサさんと共に別のトコに消えてしまった。

「おい」

「？」

誰だっけこのオレンジ頭……。

「山重孝太だっ！」

孝太って言うのかコイツ。初耳だなあ……。

「決闘を申し込むっ！」

「昨日やると言ってただろうが」

コイツ、人の話聞いてんのか？オレが言えた筋じゃないが。

「ペナルティ付きでどうだ？」

「は？」

「負けた方は、勝った方の言い分を1つ聞く」

「あゝ」

昔からそういうのには縁がないのに。

「お前、願い事はあるのか？どんなことでもいいぞ？オレには金も名誉も女もあるしな」

何もかもがあるから威張る。残念な子だ。

「ないね。強いて言えば不変の平穩、だね」

「そうかいそうかい、オレの願いも言ってやろっ」

オレの近くに歩み寄り、耳元で囁く。

「二度とオレのなのは達に近づくな」

コイツ、今何て……！？

「今、何て言った……？」

「聞こえてなかったのか？なのは、フェイト、はやて、アリサ、す
ずかに近づくなと言ったんだ」

許さねえっ！

「ま、勝つのは僕だけどね」

「言ってる」

Life・6 転校2日目で決闘とか何があった

「さて、僕は応援の方に挨拶にでも行こうかな。君も行ってきたらどうだ？」

「……」

そもそもいるハズもないのに応援に挨拶出来るかってんだ。転校2日目で味方なんていやしない。

「ホント、孤独な奴は可哀想なものね」

「あ、アリサ、その言い方は……」

相も変わらずあの5人だ。

「秀司君、1人？」

「そうだね、1人だよ」

あっちでは皆ワーキヤーやっててそれを山重が受け答える。

オレには出来ない芸当だ。尊敬したくない。

「で、聞きたいんだけどさ……アイツ、何なの？」

オレンジ頭が言ってた5人に聞いてみた。

「あんなのただの変態よ！女の敵！」

「常にエロエロなオーラ漂わせてるしなあ」

「やたらと身体をベタベタ触ってくるしね……」

「私はあの人苦手かなあ……？」

「私も……」

アリサさん、八神さん、テストロツサさん、高町さん、すずかさんの順で述べてゆく。

取り敢えず言えることは、この5人から嫌われている、ということだった。

「さあ、始めようか」

「……」

「始めッ！」

八神先生の声が響き渡ると共に竹刀を振りかざした。

「ホアチャアッ！」

どこの中国の三流映画だよ。

「せいっ！」

「ドルアッ！」

「はっ！」

「ふんっ！」

竹刀と竹刀が幾度もぶつかり合う音が体育館に響き渡る。

「そりゃっ！」

「たあっ！」

山重を壁に追い詰めた。ここから押し切れば、勝てる！

「ウラウラウラウラウラウラアッ！」

オレの竹刀が火を吹くゼイっ！ヒヤッハーツ！

怒濤の七連撃を見舞うが、怒濤の防御で全て弾かれる。

「終わりだな」

「何？」

そう言われた瞬間、山重が視界から消えた！ヤツは決してノーマルスペックなヤツではなかった！

「そおいつ！」

背後から竹刀が来るのがわかった。

「ナメんなコラァッ！」

後ろを足で蹴る。当たった感覚があり、山重が後退りしていた。

「せいっ！」

キンコーンカーンコーン

「それまでッ！この勝負引き分けッ！」

渾身の突きを放つが、八神先生が試合終了の宣言したので終わった。

「ふん、命拾いしたな」

あのヤロー調子こきやがって……。

「……」

【ほら、寝てないでペンを動かさない】

「だって、わかんねえんだもん……」

目の前にはテキストとノート、手に持っているのは0・3cmのシヤープペン。そしてテキストの横には――

【そこはx＝3じゃなくてx＝8よ】

——ウォラスだった。

【全く、まさかこの私が勉強を教える時が来るなんて……】

「コラそこ、愚痴るんじゃない」

【コラそこ、サボるんじゃない】

「……はい（泣）」

ダメだ、言葉じゃウォラスに勝てねえ……。

【それにしても転校2日目で決闘だなんて……あなた、何かしでかしたの？】

「ぜんっぜん身に覚えがない！」

【それ、胸を張って言う所じゃないわよ……】

その頃、アルヴァニスタでは……。

「何だ、貴様等は？」

「我々はアルヴァニスタ魔物研究部の者だ。急を要するので、今すぐ国王陛下にお会いしたい」

門の前で人が溜まっていた。

「ダメだ！陛下は今、ユークリッドからの使者のタスク殿との面会をなさっているのだ！」

「良いから早く通せ！事は一刻を争うんだぞ！」

「だから何度言ったらわかるんだ！ここから先には——」

「どうなさった？」

城の中から偉そうな人が現れ、護衛の人も後ろから現れた。

「た、タスク殿！こやつらが陛下に緊急でお会いしたいと——」

「用件は何だね？事によっては私も協力しよう」

「——タスク殿！」

タスクと呼ばれた人はそれを完全無視し、彼らの言うことに耳を傾ける。

言い放たれたその言葉は、その場にいた人間の空気を凍りつかせたのだった。

数分後、王室では——

「陛下っ！」

「どうなさいましたかタスク殿？忘れ物ですか？」

「実は、この者達の話聞いてやってほしいのです」

——タスクと呼ばれた人が頭を下げて頼み込んでいた。

タスクは1人の男を前に連れてくる。

「話を聞こう」

「単刀直入に言います。時空戦士の笹原秀司とロンドリーネ・E・エッフェンベルグが消えました」

Life・7 日曜日はダラけるためにある

転校してから初の日曜となった。

オレはゆったり起き上がり、リビングへと向かう。

「……そういえば、ロディ姉いないんだっけ」

昨日の夜、バイト先から電話があって午前中はいないとかなんとか……。

「私ならいるけど？」

「……あらっ？」

真横ではコーヒーを飲むロディ姉の姿が。だからバイトサボったら給料出なくなるって。

「時計見てごらん」

「んあ？」

まだフラフラする頭をどうにか耐えて時計を見た。

「3時ねえ……3時……3時っ!？」

3時だった。しかも午後。

「オレの貴重な休暇がああああっ!」

思わず叫んでしまった。「近所さんうるさくてごめんなさい。

「散歩も悪くないね」

【ハア……】

買い物ついでに散歩に行ってみた。ウォラスも何故か同行している。

「ため息つくなよ」

【クレメンテ老みたいなこと言わないで。虫酸が走る】

「褒めるなよ」

【照れないでちょうだい】

クレメンテ老、とかいうおじいちゃんが誰かも知らないが。

「あれ？秀司じゃない？」

「誰かと思えばアリサさんじゃないか」

今日はストレートか……。

しかし、残念ながらストレートなら黒髪と決めているのでストライクゾーンには……いや、何でもない。

「あんだ、なにやってるの？こんなところで」

「晩飯の買い物ついでの散歩。どうだいオレの命の恩人様、晩飯食ってくかい？」

アリスさんとすずかさんはこの世界に来てすぐのときに世話になったからな。礼をしておかなければ。

「私には専属のシェフが作ってくれる最高級のご飯あるから結構よ」

「庶民が作るゲロマズ飯は食わねえってか」

「だって、昼がバナナやらキュウリやらだったら料理出来ないのが目に見えてるでしょ！？」

「それ、そもそも料理じゃなくね？食材じゃね？」

「う、うるさいわね！何よ！この優男！」

「優男とは何だよこの般若！」

「女顔！」

「んだとゴルアッ！！」

周りから見れば迷惑以外の何物でもないだろう。何かごめんなさい。

アリスさんとも別れ、やっとの苦勞でたどり着いたスーパーハナ。

サ。

「遠かったぜイ……」

【お疲れ様】

店内に入ると程よく冷房が調整されており、程よく汗をかいたオレには天国に思えた。しばらくここから出る気にはなれない。

「さて、今日の晩飯どしよか」

【今更？】

アリサさんとの痴話喧嘩おかげで全然気にも止めなかったが、今更だ。

「今日はクリームシチューにしようかの」

【変態オヤジの真似はやめて。虫酸が走るわ。】

変態オヤジ、と書いてクレメンテ老とルビが降ってあるのはまた別の話だ。

【今度変態オヤジ（クレメンテ老）の真似をしたら口を縫い合わす】

「何という死亡フラグ……あれ、あいつサリーだっけ？エンディケスだったっけ？……どうだったか知ってるか？」

【知らんがな】

「なあウォラス」

【何よ？】

「オレ、何か悪いことしたっけ？」

【……してないと思うわ】

「じゃあ何でいきなり人消えるの？」

先程まで周りにいたスーツを着たおっさんや子供と手を繋いで歩いていた親子すらもない。

青い空はいつの間にか灰色に変色して、所々に別の色がポツポツとあるだけだった。

【……】

「何か言えよっ！」

Life・8 犬の襲はちゃんとしておけ

「ウォラスさん、オレ何かヤになってきたんだけど」

【愚痴る前に走る！あいつ等に追い付かれるわよ！】

オレは今、絶賛全力疾走中。

1つ言いたいんだが、どこから湧いたあの魔物。

「GUOOOOOOO！」

巨大な犬のような物体がオレを襲う。大体人間3人くらいのデカさだ。

「たーしーけーてー」

【そろそろ反撃するわよ】

「おま、何言ってるんだコラ」

【フレイムドライブ！】

「聞けよ」

【続けて行くわよ！フォトンブレイズ！】

「だから聞けって」

【わかったから早く構えなさい！】

理不尽だ……。何もわかってないじゃないか。

仕方がないのでウォラスを構えた。

【切り裂け！ストリームアロー！】

今だっ！

「そるあっ！」

巨大犬を斬り裂いた。

「かなり肉厚だな……」

【焼いたら美味しいかもね】

「その前に斬りづらいんだけど」

【エクスポロオオオオド！】

何か降ってきたと思ったら、急に目の前で爆発、一瞬にして肉は消え失せた。

「火力が強すぎて焼くどころか炭すら残らなかったんだが」

【試食はお預けね】

「……泣けるぜ」

オレはスーパーのビニール袋を持つと、そそくさとその場を後にした。

それから10分後。

金髪の人と栗毛の人がいた。

「あれ？」

フェイトは道路を歩いていると、不意に声をあげた。

「どうしたのフェイトちゃん？」

「この道路、アスファルトが溶けかけてるよ」

靴の裏には若干ではあるが、アスファルトがこびりついていていた。

フェイトは地面に屈みこみ、道路を触る。

「まだ暖かい。ここで何らかの高火力魔法が発動したんだと思う」

「これ、魔力変換の炎持ちの人が原因なのかな？」

「多分。私もなのと同じこと考えてた」

「「わからない……」」

二人は唸るように言った。

朝——それは至福の時。

オレは朝、学校につくと本を読み始める。

「……」

ホームルームが始まるまでは基本ノンストップ。

「ホームルーム始めるぞ」

先生が現れ、至福の時終了。

幸せはすぐに終わるようこの世は作られている……とかなんとか言ってみたが、やはり柄にも合わなかったり。

「じゃ、ホームルームは終わりにするかな。テスト近いからちゃんと勉強しておけよ。特に笹原」

「ギクツ!?!」

何かお疲れ、オレ。

「何故だ……何故秋なのにこんなに暑い!?!」

「知らねーよ！どうせ地球温暖化とかの影響で暑いんだろ！？」

「てめーら暑い暑い言ってんじゃねーよ！更に暑くなるだろうが！」

「「お前も言ってんじゃねーか」「

「んだとゴルアッ！」

「世界には修造が何人いるんだよ……」

暑さを耐え凌げないヤツらが口々に言い始めた。

オリーブヴィレッジにも遠く及ばない暑さなのに何を言う。

「きょーはプールにはいたいきぶんだねーフェイトちゃん」

「そうだねーなのは」

隣と前も相当グダっているな……。そしてプールとは何ぞ？

その時先生が教室に飛び込み、こう言った。

「着替えろ！暑いからプール入るぞ！」

「「「「「ヤッター（ヨッシャー）ッ！」「」「」「」

クラス全体が一丸になった瞬間だった。だからプールとは何ぞ？

L i f e ・ 9 説教は閻魔様に任せるべし

「今日もお疲れ、オレ」

プールの端では、オレが浮き輪に浮きながら青い空を見上げていた。

「空が青いなー……」

あ、あのくもそふとくりーむみたい。

若干現実逃避しているが、なに、気にすることはない。

因みに、皆はなんやかんややって遊んでいる。皆元気だなー。

「クレスさん達、今頃何してんのかな……」

この世界にはいない、かつての盟友。もう二度と会うことのできない友。

「会いたいな……」

空の色もあの世界とは変わらないのに、何故こつも違つのか。氣になつて仕方がない。

「誰に？」

「うわっぶー!？」

聞き覚えのある声と共にやってきたのは大量の水。

それと同時に誰かの手によって浮き輪から正面に投げ出される。

（出るオ！ウンディーネ！オレを助けてくれ！ウンディイイイネ
エエエエエ！）

しかしなにもおこらなかつた！

現実とは非常に非情だと思った瞬間である。シャレにもあらず。

そしてもがきつつ少しずつ前進し続けるオレ！頑張れオレ！正面の
誰かに助けてもらえ！

「なのは、流石にやりすg」

刹那、オレの手が誰かのブラに引つ掛かり宙を舞う。シツクな感じ
を醸し出している黒のブラか。チョイスイイと思う。オレも黒好き
よ黒。

「えっ」

ってそうじゃないんだよ。その話はまだしたいくらいだけどそうじ
ゃないんだよ。

弾力のある白い肌。

顔を真っ赤にして恥ずかしがる顔。

ってそうじゃないんだよ。その話はまだしたいくらいだけどそうじ
ゃないんだよ。

弾力のある白い肌。

顔を真っ赤にして恥ずかしがる顔。

そして隠しきれない程自重という言葉を知らず育った胸。

一言で言つと、秘境。あれは間違いなく世界遺産レベルを軽く越し
てる。

誰の顔かなんて一瞬過ぎてわかんなかったけどな。取り敢えず美人
ってことで。そうでなかったら許せん。

「きゃあああああつ！」

被害者怒りの鉄拳炸裂。あべしである。

これは罠だ！これは溺れさせたヤツらがオレを陥れる為に仕組んだ
罠だ！

水にプカプカ浮いてる黒のブラを見ながらオレはネバーランドに旅
立ったのだった。

目が覚めた。ええ、パツチリと。

目の前には知らない天井……ではなく、科学薬品の類いの乗ってい
るデスク。

そして何かを調合する白衣を纏ったボブカットの薄い金髪のオネー
サン。ウフウフ言ってる、正直、何だか危なっかしい感じがしてな
らない。

「アレとアレを混ぜれば試作段階は完成ね。ウフフフ……」

注射器持ちながら喜ばないでください。怖いから。

「あ、起きたのね？」

注射器にさっきの入れながらこっちに近づかないでください。怖い
から。

「今日は災難だったわね」

そう言いながら勝手に人を人体実験の被検体にしようとしなくていい
ただきたい。軽く死ねるから。

「さて、お注射しまさ「ちょっと待ったあっ！」!?」

「何しとるんやシャルル！」

「は、はやてちゃん!?それに皆も!?!」

相変わらずの5人の登場。5人で出てくるのがマイナーになりつつ
ある今日この頃。

因みに起きてから1度も喋っていない。オメーら主人公差し置いて
なに発言してんだ。

これじゃ、

主人公空気化↓みんなに認知されない↓日々の生活が嫌になる↓空
気にならないよう修行に出る↓いくえ不明

がオチというのが目に見えているだろうが。

「あ、あのーはやてちゃん？」

「八神さんどうしたの？」

「シャルル、今日の晩御飯抜きな」

「そんな！」

「聞いて」

どうやら主人公空気化問題が深刻らしい。

「あんた、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃない、問題だ」

主に精神面が。

空気化も大概にしていたきたい。正直、温暖化よりも空気化って深刻だろ。

「さっきはごめん」

「ごめんなさい」

「すまん、やり過ぎてもうたわ」

「私も謝っておくわ」

「ごめんね」

「は？」

コイツらが何言ってるのかサッパリングな件。

「という訳なんです」

成る程成る程。きゃつらか。オレを陥れたのはきゃつらか。

何が起こったのか簡潔に説明すると、
史上最高の秘境を超至近距離で観察↓テストロッサさんの 渾身
の右ストレート！↓撃沈

「ほんつとくにごめんなさいっ！」

高町さん達が腰を90度に曲げて謝る。うん、良い曲がりかただ。
クッキリしてる。

「てかマジですみませんテストロッサさん。こんな安い頭を下げて
許してもらえならいくらでも下げますからマジで許してやってく
ださい」

今のオレは、床に飛び降りてorzの格好。

巷で言う土下座だ。

こんな安い頭を下げて許してもらえればいくらでも下げる。頭を上
げると言われても下げる。

「あ、頭を上げて」

「はい……」

あ、上げちった。

「私は怒ってないから、殴った私を許して下さい」

「……はい」

仲直り成功。意外とアツサリング立った気がしてならない。

「ただしその4人、テメーらはダメだ」

「……なんだとおっ!?」

その後、某緑髪の幼女閻魔様の如く説教してやった。勝るとも劣らない長さだったと思う。

やはり慣れないことはやるべきではないと実感した瞬間である。今度からは閻魔様にでも任せようと決意した次第。ならば閻魔様がどこに生息しているか探さなくては。

L i f e ・ 1 0 犬だけではなく猫にも躑はしておけ

「道路が溶ける程の熱量を放てる魔導師か……」

某一室、暗い中会話する声があつた。

「データを見る限り、危険度はかなり高いと見た」

「ロストログアが絡んでくるかもしれんのお……」

喋る脳味噌。数3つ。

奇妙と呼ばずして何と呼べと言うのだろうか。なにコレ珍百景に投稿すれば絶対に商品を貰える光景だろう。

脳の前にはモニターにはとある事件の資料があつた。

道路の融解。

局員が追っていた魔力生物の消滅。

魔力が放出されていない。

「謎が多いのお……」

3つの脳味噌が唸る。

「取り敢えず、このまま犯人を野放ししておくのは危険。近隣の高ランク魔導師を派遣しよう」

「良い案だ。

丁度第97管理外世界出身者にはP・T事件や闇の書事件を解決したリンディ・ハラオウンの艦隊とエース達がいる。

物を一瞬で蒸発させる力は危険、早急に事を解決すべきだ。先程上げた事件を担当した者達を召集し、事に当たらせてはいいかな？」

「賛成だ」

「異論はない」

「君、リンディ・ハラOWNに連絡しておいてくれ」

一人の女性がモニターを弄りながら、

「はい」

と答えた。

「ロストログア、ですか？」

「ええ、今回の道路の融解の件に強力なロストログアが絡んできている可能性があるわ。このままでは危険、そう危惧した最高評議会は私達に捜査上特別権と戦力を投入したの」

「またも某所。」

「今度は光る床だ。」

そこには数多くの人間が集まっている。

「捜査上特別権力って？」

栗毛の女性の上に？が現れた気がした。

「その事件の捜査の為なら優先的に新たな戦力投入やデバイス修理などをさせてくれる権力のことです」

「取り敢えず、今回の事件を捜査して延長線上の奴を取っ捕まえろってことっすよね？」

オレンジ髪がそう聞くと緑髪の女性は頷いた。

「皆さん知つての通り、証拠は蒸発したと思われる生物の体毛のみで証拠がありません。

事件の現場検証を再度徹底的にやります。

なのはさん達は犯人が出たときに対応出来るよう待機してください」

「「「はい！」「」」

「それとクロノを筆頭に現場検証を20時から行います。クロノ、現地の指揮は任せるわ」

「はい艦長」

「これで解散にしましょう。

くれぐれも無茶はしないようにね、特になのはさんは」

栗毛の女性はそっぽを向いてしまった。

「我が名はサブノック！我が信念を貫く者なり！」

【……知り合い？】

「こんな痛々しいヤツ知らね」

お面とペット……ポチで良いか。

「ポチではない！オセだ！」

ポチもオセもほとんど変わらないじゃないか。ポチがさっきからキレかけてるし。

「我が主、エルレイン様の命により、貴様の命、貰い受ける！」

「だって、ウォラス」

【あなたのことよ】

「え」

なん……だと……。

「では行くぞ！」

「まあ落ち着けて。OK？」

「はあッ！」

「聞いてよ」

シカト決め込まれた。

オレの精神に537のダメージ。

【バーンストライク！】

「お前もなにしちよる」

【反撃よ。売られた喧嘩は買わなきゃいけないのよ】

さいですか。

2人とももつと温厚に闘えよ。

それとポチ、太股に噛みつくな。地味に痛いから。つたく、躑のなつてない犬だ。

「オセは犬ではない！ポチでもないわア！」

じゃああれなによ。

「ヒヨウだアッ！」

ヒヨウって確か猫科じゃなかったっけ。何故に警察犬のようなことをする。

「ウ~~~~ッ」

怒るんじゃない。牙が更に刺さって痛いだろうが。

【あなたも反撃しなさい！】

「わかったよ……」

ウォラスを取り出す。

「さっきからいてえんだよ犬っコロがつ！」

「キャインっ！」

ポチを斬った。

「やっぱ犬じゃん！」

「犬ではない！」

【桑の実 DA！】

「違う！」

すかさずウォラスもボケ始める。いいぞ、もっとやれ。

「躑はちゃんと、しないとなあ……」

「キャイン！」

こちらはこちらで犬の躑を楽しんでるのであちらはウォラスに任せよう。なんだかんだでウォラスが晶術ハメ決めてるし。

しばらく替わりに躑しておくか。

「ポチ！お手！」

…… 噛まりました。 お手てがそろそろ限界。

対するウォラスは……？

【ウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインドアローウインド（ry）】

なんてムリゲー。あれこそ真正の鬼畜。敵に軽く同情してしまったがなに、気にすることはない。

というかあれに勝るものはいるのだろうか。それが気になって仕方がない。

「そろそろ止めさして帰ろう。オレ何もしてないけど」

【ウインドアロー！あ、誤射った】

「『【あ』』」

ポチオワタ。

「『オセエエエエ（ポチイイイイ）！』」

止めすらせんかった。屈辱なり。

【タイダルウエエエエエブ！
「ちょ」

タイダルウエーブに流されました。

サブノック？誰だそいつは。

Life・11 吸血鬼の身体スペックは羨ましいばかり

「道路が水浸し……」

「せやな……」

現場に着いた私ことフェイト・T・ハラウンと高町なのは、八神はやて。

「フェイトちゃん、はやてちゃん、なんかこの辺一帯だけ水浸しって変じゃない？」

「確かに。でも何で水浸しなんだろう？」

「うゝむ……」

私達3人は暫く考え込むと答えを出した。

「「「わからない（わからん）っ！」「」」

これが答えになってない事は薄々感付いていた。

「あゝあ、現場検証面倒やなあ……」

はやての愚痴になのはが突っ込んで、渋々はやては仕事を始める。でもそこがはやてらしい、私はそう思う。

「ヘルペスミィ……」

机に伏して助けを求める。

「どうしたの？」

隣のテストロッサさんだ。今回は彼女の周りの面々は留守のようである。

「ウォラスが【桑の実 DA!】とか言ったのが妙に頭に残って離れない。へるぷ」

「ええ！？え、えつと……」

テストロッサさんは悩んだのち、こう言った。

「く、桑の実 DA!」

可愛げがあるが、それじゃ何も変わらないジャマイカ……。

「じ、ごめんなさい！」

謝るテストロッサさんもまた可愛い。鼻血だして悶え死にそう。

「い、いや、テストロッサさんは悪くない。悪いのはウォラスなんだ。そうだ。そうに違いない」

「というか……ウォラスって、誰？」

あ……。

「し、知り合いだよ！タダの知り合い！」

「何を慌ててるの？」

「な、何でもない！」

……何となくだが、嫌な予感がしてきた。

「エルレイン様、次はいかがいたしましょう？」

エルレインは静かに目を開けた。

「この娘を使う」

鏡に映されたのは紫の髪的女性だった。

「大いなる神の御霊をここに！」

「ということとは、ここはyⅡ2になるわけだ」

なるほど、さっぱりわからん。

数学の授業。

オレが最も苦手とする授業だ。

今日は席の周りの高町さんやテストロッサさんがいないので暇だ。数学の授業を理解するためには、2人の存在と協力が必要不可欠。今回の授業は捨てますか。

「うああっ!？」

「月村、どうした!？」

すずかさんが苦しむのが見えた。かなり苦しそうなので若干心配。

【不味いわね】

バックの中に突っ込んでおいたウォラスが言う。

「は？」

「アアアアッ!？」

状況を整理しよう。

吸血鬼化するすずかさん。

同じ教室にいるオレ。

これって――

「――明らかオレ死亡フラグだよな?」

オレオワタ。

「うわあああああ！」

「逃げろおおおお！」

教室から次々に飛び出していく生徒達。

「きゃあああああ！」

「アリサ！早くこっちへ！」

残ったのはオレンジ髪 of 山なんとかとアリサさん、そしてオレ。

「……力が入らない！？」

ジリジリとアリサさんとの間合いを詰めるすずかさん。正直、不味い。

「仕方がない……セツトアップ！」

男の裸に興味なんてあるか。さっさと終われ。今も刻一刻とアリサさんがやばくなってるんだぜ？

【あなたが行けば良いじゃない】

「剣の癖にマスターのオレに死ねと申すか」

オレはまだまだ死にたくはない。

「いや！助けて！」

【あいつ、女がピンチだったのにいつまで自分の裸見せる気よ。そんな良いガタイしてないのに】

最も。アイツは実はバカなんじゃないかとか思い始めているオレがいる。

「行くぞウオラス」

【合点承知の助】

「どこから引つ張ってきたその謎の単語の集まりは」

ウオラスを腰に携えるとアリサさんに向かって走り出した。

「アリサさん！」

アリサを巷で言うお姫様抱っこなる物をしてその場を離れる。

「しっかり捕まってるよ！」

「え？」

そう言った途端、窓ガラスをぶち破って飛び出した。

「ちょ、ちよつと！ここ3階よ！？」

顔を赤らめながら言ってきた。

確かに、自殺願望だったらやりかねないわなそんなこと。

「よいしょおおおおッ！」

上手く着地したものの、脚が割れそうに痛い。もう二度とやらない。

そう思いながらアリサさんを校庭の端に連れていく。

「さて、すずかさん助けるかな」

アリサさんに背を向けてウオラスを鞘から取り出す。

「あ、あんた、背中にガラスが……」

さつきガラスの破片を背中に浴びながら落ちたのだ。アリサさんに当たらないよう覆い被さっているので彼女は恐らく無傷。

「ああ、これ？新手のファッションだよ」

「嘘つけイ！」

まさか腰抜けた後のヤツにグーパンされるとは。

オレが助けなくてもなんとかなったんじゃなかるうか。

「ま、無事で何よりだよ。オレ、また護れなかったかと思ってさ」

「……え？」

ディオとメルは、オレのことを見ていてくれるだろうか？

「おでましのようだ」

先程飛び出した窓から現れたのはすずかさんだった。

「そおいッ！」

【フレイムドライブ！】

オレ達の攻撃を意図も容易くいなされてしまう。

あのオレンジは何している。良い加減裸終われ。

「すずかさんってこんなにスペック良いのか。羨ましい」

勉強。運動。性格。

まさに才色兼備と言ったトコか。

【吸血鬼だから当然でしょう？吸血鬼になりたいなら大人しく噛まれなさい】

「人間はまだやめたくない」

人間止めたら友達消えるし。エルフとかハーフエルフだったらまだ良いけど。

「断空剣ッ！」

【スプラッシュッ！】

かすりもしない。

こんなときにミントさんがいてくれればタイムストップで動き止め

られるのに。

「これなんてムリゲー」

【古より伝わりし浄化の炎……いくわよ！】

お前は人を殺す気か。上級術使うとか正気の沙汰じゃない。

【エンシェントノヴァ！】

赤い極太の線が空から落ちてきてすずかさんをとらえる。

「死んでませんよーに……」

浄化じゃなくて肅清が正解だと思ったオレがいたりいなかったり。

しかし、オレの願いは悪い意味で叶えられた。

「——っ!？」

線の中から拳が飛んで来たのだ。

反射的にすずかさんの腕を斬り落としてしまった。

「ヤッベエ……腕斬り落としちゃったよオイ」

【落ち着いて！吸血鬼なら傷口から再生して、また腕が生えてくるはずよ！】

言われた通り、すずかさんの傷口から腕が生えてきた。

【ねっ】

「ねっ、は良いから打開策ぶりーず」

すずかさんの拳の動きがかなり速くなって来ていて、追い付くのがやっとだった。これではオレが倒れるのも時間の問題。

「し、死ぬって!」

【泣き言言わないの!クラッシュガストツ!】

これじゃ誰でも泣き言言いたくなるわ。

そう思っていると連撃を浴びせられた。

助骨が2、3本イッたかもしれん。吸血鬼はもう二度と相手にしたくはない。

「あ、あいつ……!??」

すずかが修司を殴り飛ばす。

何があつたのか、5mほど飛ばされて倒れていた。

凄い力……。あれが、人間の力だというの!?

「何なのよ!??……夢なら早く覚めてよ!」

すずかがこつちを向く。

殺気に道溢れた目だ。

次はお前を殺してやる。そんな感じの目。

「まあ待てよ……まだオレはヘバツちやいないぜ？もうすぐヘバるけど」

3階から飛び降りてガラスの破片を背中に浴びてあり得ないほど強い力の拳を幾度も浴びても、なおもこの男は立ち上がるのか。

身体がボロボロで起き上がる力さえ残ってないのにこの男は己の気で立ち上がるのか。

「そるあつ！」

また軽くいなされて右ストレートを噛まされた。彼はまた倒れる。

もう嫌だ。

もうこんなに人が傷つくのは見たくない。

私にも、力さえあれば……。

【力を求めるのか】

「誰！？」

周りを見渡しても何もない。

【汝は力を求めるのか】

「欲しいわよ！もう誰かが傷つくのは嫌だから！」

【フツ、スタンにそっくりだな……。良いだろう、貴様に我の力を貸してやる。我の名を叫ぶのだ！】

目の前に独特な形をした剣が現れる。

「あんたの名前は……」

【我の名は……】

「【ディムロスッ！】」

その時、大地が揺れ、なのは達が魔導師だと知ったあの日にあった火柱のような物が噴き出した。

何この剣――

「――凄い、力が溢れてくる……！」

【それは我とお前の力が共鳴しあっているからだな。……来るぞ！】

「えゝ！？」

初弾を何とか防ぎきった私は反撃を試みる。

「魔神剣ッ！」

頭の中に流れてきた内容をそのまま従い、やってみるとできてしまった。

すずかがまた拳で殴りかかってくる。

「裂空斬ッ！」

回転斬りで上手く回避を試みた。

その時、私は何となくだが弱点がわかってしまった。

「頭上までは反応しきれてない」

【頭上か……戦いづらいな……】

私とディムロスは悩み始めた。

「アリサちゃん！」

「……なのは？今日はフェイトとはやてと一緒に事件の捜査じゃ……」

「はやてちゃんに現場を任せて来たの！フェイトちゃんは今闘ってる！」

あのですかと何とか渡り合っているフェイトがいた。

「……」

【どこよ？】

「精霊の森？」

精霊の木の前にいた。

【だからどこよ？】

しかし、何故ここに……？

すると、左から人の声が聞こえた。

「父さん、母さん、ロディと修司がこの世界から消えて半年になりました」

「クレスさん!？」

聞こえてないようだ。

ミントさんもチェスターさんもアーチエさんもクラスさんもすずちゃんも近くの木の下にいたが、全く気づいてない。

「僕らは、彼女らを絶対に探しだしてみせます」

クレスさんは立ち上がると、

「これから忙しくなるのであまり会いに行けないかもしれないですが……いずれまた来ます。では、また会いましょう、父さん、母さん」

【シリアスな空気ね〜】

「黙れシリアスプレイヤー」

クレスさん達がその場を後にすると、木の中から女の人 appeared。

「マーテル……」

【いや、だから誰よ?】

「来ましたか、笹原修司。そしてウォラス・ハミルトン」

マーテルはそう言つと、言葉を続ける。

「今ここに呼んだのは他にもありません。エルレインのことです」

「【っ！？】」

エルレインだって！？

「エルレインは今、全次元世界の人間に幸福をもたらそうとしています」

【あら、良い奴じゃない。ただのアラサーオバサンかと思ってたわ】

エルレイン、言われてるぞ。いいぞもつとやれ。

「しかし、彼女の考えは歪み始めています」

「具体的にどんな歪み方を……？」

「人類を助けるためには1度人類を滅ぼすしかない、そう考え始めたのです」

歪み方パネエwww

【ここにハロルドがいたらこう言うでしょうね。「明らかに論理が破綻してる」って】

最も。

エルレインはそこまで頭イッてたのか。

今度良い医者でも紹介してやろう。

「そこで、あなたにはエルレインの野望を止めてもらいます」

「ちょっと待ってくれ！」

「頼みましたよ、修司……」

消えますた。

理不尽だ。

そう思つてるとまた光に包まれた。

「知らない天」……いやなんでもない」

先日世話になったシャルマル先生がいたのに気づいて前言撤回。
いずれは言ってみたい。今日のリベンジとして。

「あ、起きたのね？」

「いや、これ寢言です」

何となく嫌な予感した。前回なんかの実験台にされかけたし。マッドサイエンティスト的な笑みを浮かべて注射器構えて近づいて来るし。

シャルマル先生来ないでー、三流のホラー映画みたいだからー。

「ウフフフフ……今日こそこの身体で実験を……」

「——シャルツ！」

誰だお前はッ！

「地獄からの使者、スP」はいはい、ボケは良いからね。」いただだだだっ！？頼むから耳を引っ張らんでやつ！」

八神さんとアリサさんだった。

それと人の心を読むんじゃない。

「シャル、後でお説教や」

「ええっ！？」

ざまーみる。次からはマネキンを実験台にしないさ。

「てかここどこ？」

「今更？」

本来、一番始めに気づくべきだった事を今更気づいた。アリサさんの毒舌がオレの心にチクリと刺さる。

お、オレは悪くねえ！悪いのはシャル先生なんだ！

「ここは、時空管理局の航行艦“アースラ”の医務室や」

「阿修羅の医務室？なんか他の医者とか患者とかかなりゴツそうだな……」

「アースラよ！ちゃんと覚えなさい！」

アースラね。よし、覚えた。すぐ忘れるけど。

「……で、ここどこよ？」

「『『良い加減にしろいつ！』『』』」

シャル先生も加わってグーパンされました。物凄く痛かったです。

てか医務室で怪我するとかありえねえ。

「カツ井は出ますか」

「出ません」

出ないのか。

「ならば親子井でも『出ません』『デスヨネー』」

なんなんだこの緑髪のおねいさんは。

狭い感じの部屋の中には机が1つ。

それを仕切りに緑髪のおねいさん。

そして見知った顔の高町さん、ハラOWNさん、八神さん。

「さて、始めましょうか」

「やっぱりカツ丼は出ませんか」

「出ません」

やっぱり出ないのか。

「私はこの艦の艦長のリンディ・ハラOWN提督です。後ろの3人は左から高町なのは戦技教導官、フェイト・T・ハラOWN本局執務官、八神はやて特別捜査官」

「あ、どーも」

挨拶は礼儀だ。

紳士のたしなみだ。

粗末にはいけない。そう思う。

簡単にまとめると、今日のオレは紳士的だ、ということ。

「まず、何故あなたはあの場から咄嗟に逃げなかったのですか？」

「なんか襲われてたし。助けるのに理由なんてないんじゃないですか？」

ハラOWN提督は表情1つ変えずにオレを見てくる。

……無表情だ。

「では三階の窓から何故飛び降りたのですか？
あの高さならば頭から落ちれば死ぬのはほぼ明白だったはずですが？」

「頭から飛び降りる？バカ言え！正気か？

頭から落ちればそりゃ無傷じゃ済まないよな、オレもアリサさんも」

自分からそんなヘマするとかありえねえ。

「なら！」

なんじゃ高町さん。ワシは年老いてるから早く終わらせたいのだが。

「なら、もしも着地したときに足を骨折したら……」

「アリサさんと心中します……嘘です、嘘ですから皆さん武器収めて。」

アリサさんだけ何とか逃がして死ぬつもりだった。」

我ながら思う。

よく回る舌だ。

「血を吸われるなり殴り殺されるなり、好きに殺されるよ」

「死ぬ覚悟まで出来ていたなんて……」

成り行きに身を任せただけっす。

そこまで重い話じゃないんだけど……。

「これは、あなたの物ですか？」

ハラオウン提督が取り出したのは一本の剣。

【へるぷ】

まさしくオレの剣、ソーディアン・ウォラスだった。

「それは間違いなくオレのだ」

「一応、魔力が籠ってるように見えたので検査をさせてもらいました。特に何もなかったのでお返しします」

「あ、ども」

ウォラスを受けとる。相変わらずしっくり来る重さと形だ。

「あの、すずかさんは今……」

「アリサさんと共に自宅に帰りましたよ」

あれ、あの人達帰ったのか。

「これで質問は終わりです。忙しい中、失礼しました」

ハラオウン提督は部屋を後にした。続いて八神さんとテストロッサさんも出ていく。

「ありがとう」

「は？」

「アリサちゃんを助けてくれてありがとう」

あゝ、そういうことね。

「困ってるヤツがいたら助ける。
それって当たり前だと思うんだ」

「……そうだね」

高町さんは踵を返すとそのまま部屋を後にした。
てかドア閉めるな。オレも出ていくんだから。

Life・13 テスト？そんなつまらんもの滅んでしまえ

「あゝ、ねむ」

デカイ欠伸をしながら教室に入ると、テストロッサさんに話しかけられた。

「おはよう。今日テストだけど、大丈夫？」

「え」

オワタ。

「始めてください」

テストが始まった。

今日の1限は公民のようで。

(1) 今の首相の名前を答えなさい。

(7) 天皇の地位は国民の。。。である。
。。。に当たるものを答えなさい。

なにこのムリゲー。オワタ。

後日。

「赤点……だと……!？」

全教科赤を食らった。

全教科盛大に食らった。

それはもう盛大に。

どの教科担当の先生にも職員室に呼び出されて「お前勉強なめてるだろ」と言われるくらい。

「勉強なんて、サッパリングwww」

諦めた。

だってやる意義なくね？

国語をやるにしろ数学をやるにしろ、どの教科をやったところで将来的に考えても自分の利益になるものは限りなく少ない。

数学の図形の問題とか良い例だ。

諸君、面積の求め方を知ったところで日常生活に使うだろうか？

答えは否。

よろしい、ならば降参だ。

「そういえば、修司はテストどうだったの？」

オワタ。

「全部1桁台って……」

「これは……ねえ？」

「サーセン」

椅子から跳ね上がって床に着くと同時に土下座する。

この土下座は某岩男の出るゲームのとあるドクターを凌駕する綺麗さであると信じたい。

「少し、勉強しようか……」

「ノオオオオオツ！」

オワタ。

「ウォラス、オレ朽ち果てそう」

【軟弱者は消え失せろ！】

「ウボアー」

バツサリ。

慈悲すらない。正に真性の鬼畜。

「ウォラス、しゅーは何かしてきたの？」

【テストの点数が全部1桁台だったから周りの席の人の監視のもと、勉強させられてたわよ】

「あゝ、なるほどね……」

机でグデーとなっているオレを他所になに同情してくれてんだコラ。

「ケーキ食べる？」

「食べる！」

即決。

「んまいっ！このイチゴショートんまいっ！どこで手に入れたの？」

「バイト先の売れ残りを貰ったんだよ」

なるほど、それならばただで甘味が貰えるな。今度行ってみるか……。

「今度行くか……」

バイト先が確か翠屋って名前だったはず。根性で探し当ててみるか……。

【好きねえ、甘いもの】

「だって甘いんだもの」

【糖尿病になるかもね】

「え」

なにそれこわい。

Life・14 プライドは投げ捨てるもの。そうじゃなきゃやってられない

「という訳で、何か案を出して！」

ホームルーム。

またの名を先生の長話と言う。

それをアリサさんが取り仕切る。

黒板にはデカデカと“文化祭”と書かれていた。

「メイド喫茶が良いと思いまゝす！」

「いや、そこはあえてチャイナ服にすべきだろ」

「何言ってんだお前ら！そこはスク水に決まってんだよ！」

オレンジ頭率いるオレンジ組が賑やかである。嫌な意味で。
アリサさんはシカトして“喫茶店”と黒板に書いた。

「演劇とかどうでしょうか？」

「合唱！」

演劇、合唱……何かパツとしないよね。演劇部とかあるし。

「熱くなれよ！」

おいちよつとマテ。

文化祭とやらで修造が現れたら火事になってそれはそれは大変なこ

とになるだろうが。消防署に世話になるからやめざるを得ない。

「はい、いないなら多数決取るわよ。喫茶店やりたい人あげて――過半数越えたのでこれにします」

オレンジ頭を筆頭にその周辺が歓喜に包まれた。

「で、なに喫茶にするよ？」

「メイド！」

「チャイナ服！」

「スク水！」

「メイド!!！」

「チャイナ服!!！」

「スク水!!！」

収集がつかなくなってきた。アリサさんの苦勞が身に染みてわかった瞬間である。

「それだつたらコスプレ喫茶にすれば良いんじゃない？」

「『それだつ!!』『それだつ!!』『それだつ!!』」

アリサさんに助け船を出してみた。

ここまで見事に食い付くとは、オレンジ頭一味がどれだけ変態がよくわかる。人のことを言える立場ではないが。

「ちょっと待ちなさいよ！嫌な女子だっているんだからただの喫茶店でい「あつそ。この俺の崇高な思考をわからないとはな……。すまないね、もう君とは関わらないよ」「ごめんなさい」

あっけねえ……。

気の強そうな女の子が一瞬にして身を引いた。

それほど偉いのかオレンジ頭。それほどモテるのかオレンジ頭。

「コスプレ喫茶がいい人あげて——ってほぼ全員じゃない！」

明らか可決。

女子生徒死亡フラグなんですからわかります。

挙げてないのはいつもの5人組とオレ位だろう。手を挙げるのすらめんどくさい。

「仕方ないわね……コスプレ喫茶決定ね」

あれ、何故か嫌な予感が……。

「何故こうなった……」

「ええやん、減るもんじゃないし」

「減るわ！」

主に精神面とかプライドとか。

「ケーキ奢るから喫茶店の下見行くからオトモとして来い」と言われてホイホイついていったオレは絶望した。

「何でオレが女装なんて……」

「しょうがないじゃない。皆部活とか委員会とかで駆り出されて女手が足りないんだから」

逃げようと思ったってそうはいかない。

普段大人しいテストロツサさんとすずかさんが笑顔でオレの両腕をガッチリホールド。腕の力がマジパネエ。

後ろには高町さんがいて、良い笑顔で服を掴んで離さない。
てかアンタ握力いくつよ。

「べつ、別に嬉しくなんてないんだからねっ！」と心の中で対抗してみたが本当に嬉しくない。

本当に好ましくない展開だ。よろしい、ならば映画が終わった後の応募者全員サービスでこの5人組をプレゼントだ。

「それに、女の子っぽいしね」

高町さんの言葉がグサリと心に刺さる。
アンタは悪魔か。

「なんか言った？」

「ナンデモナイデス……」

頭が軋む。

ホントアンタ握力いくつよ。

「ただいまー」

「……お邪魔しまーす」「……」

着いたのは喫茶店という名の墓場。

またの名をラストダンジョンという。

「あ、エトちゃんお帰りー」しゅーもよく来たね」

「私はエトちゃんじゃないって何度言えばわかるんですかロディさん！」

「ロディ姉のバイト先ここだったのか。取り敢えず何でも良いからへるぷ」

「……何が？」

とある部屋の角では、異様な物が見えた。

「クツクツクツ、もう逃げられへんで」

「さあ、大人しくなさい？」

八神さんとアリサさんが黒い笑みを浮かべながらジリジリと近づいている。

彼女らの後ろには他の面子までいて、ロディ姉や高町さんのお母様と共に腹を抱えて笑い飛ばしてくる。

「やめろおおおおっ！」

封印されたダオスの気持ちがよくわかった瞬間である。わかりたくもなかったが。

「その後、彼を見た者は誰もいなかった……」

誰だ今オレを殺したヤツ。

「うーん！メイド服も似合うねえ」

「褒めてるんだろうけど全然嬉しくないから」

ナンダコレハ。

現状を見ると、まずこの一言に尽きるだろう。

「何故羞恥刑を選んだ。もっと他に刑はあるんだから別のにしてほしかった。」

てかオレなにもしてないのに何故こうなった」

「修司君が女顔だから」

「なんだとっ！？」

「じゃ、次これね」

全オレが泣いた。

「今日だけでオレの精神の寿命がマッハ。男として必要なプライドとかももうズタズタ。鬱だ死のう」

【何かあったの？】

「察して」

俺の名前は門田康郎。

二次創作の小説で見かけたこともあるであろう、“転生者”だ。

転生する前の俺は、外面では“なりたてホヤホヤの取り柄のないただの平社員”だった。

しかし、内面は違う。

“なのは厨”

そう、自他認める“なのは厨”だったのだ。

それもかなりの重症な位で、アニメやマンガ、映画もなのはが多かったし、二次創作も大体がなのは。

画像フォルダを8スクロールしなければ他のアニメが出てこない。

体格も若干太り気味で、おまけに黒くフレームも大きめに作られている眼鏡をかけていた。

学校での成績は中の下。補習にも度々出て、先生には世話になった記憶がある。

運動面は……察してほしい。

そんな何不自由ない生活を送っていた俺は、死んだ。

3日ほど休暇をとり、アメリカのニューヨークへ家族旅行に行った。いや、そのはずだった、の方が正しいのかもしれない。

今日から毎年恒例になりつつある旅行が始まる。
今年は入社記念として無駄に奮発して海外へ。
ニューヨークは正直、楽しみじゃない。
何故ならなのはが見れないからだ。

「なんかダルいなあ……」

ボソツと独り言を呟く。

誰にも聞こえてはいないようだが、ダルいものはダルい。

そう考えていると段々と睡魔に襲われてくる。考えるのは苦手だ。

睡魔に身を委ねて、俺は眠りについた。

「すまぬ」

「はい？」

気づいたら、いかにも威厳ありげな大部屋にいた。

「ワシはお前達で言う“神”とかいう奴じゃ」

「確かに、いろんな意味で髪ですよ……で、どこにいますか？」

「お前の目の前じゃ！」

「……ツラ？」

目の前にはただのツラ。

真ん中がハゲてて、既に使い物になってない。

「……何だつて？」

「ツラだろ？」

「ツラじゃない、神だ」

「いや、ツラなんだから髪はあるだろ。円形脱毛してるけど」

「な、なんだつてええええええ！？」

「あ、発音の問題だったのね。そりゃ悪かったよのび太くん」

「誰かのび太だ誰が」

コイツの言動もなかなかイライラする。

「取り敢えず、君には転生してもらってから。
チート能力もあげるよ。」

願いを言いながらこの毛を抜けば叶うから。」

「えっ？それなら、ハーレムを築くことも……」

「出来るが……」

イヤッホウ！

「4本だけじゃぞ？それ以上抜いたらただじゃ済まさん」

色々恐ろしそうだ。

4本だけとか少なすぎるが、まあいいか。

「オレンジ髪のおッドアイイケメンにしてくれ！

それと、魔力はあり得ないくらい多く！

自然と女が惚れていく能力も！

あと、勝利を約束する能力を！」

イケメン顔。

あり得ん量魔力。

生きるエクスカリバー能力。

女も次々に惚れていく。

どれを取っても完璧だ。

エクスカリバー能力さえあれば戦闘で負けることはないし、女が惚れていく能力さえあればなのはやフェイトも自然に釣り上げられる計算になる。

うむ、完璧。

「じゃーいいかの？行ってくるが良い」

オレはまた光に包まれた。

「あ、言い忘れてたけど主人公一派には効かないからー……っってもういないか」

そして、オレは山重孝太と名乗るようになった。

無印に入る頃に転生したらしく、年齢もなのと同じ。用意された家も翠屋に結構近い。

それはおいといて、だ。

ある日、物語の介入を始めた。

なのはがレイジングハートを初めて手にした直後辺りだ。少し前に引き出しにあった剣型デバイスで介入し始めた。

その後、流れに身を任せてなのは側について“P・T事件”を戦っ
いぬいた。

ただ、プレシアは許せなかった。

自分の子供を人形扱いするのが許せなかった。

アースラに戻ってから泣いていたフェイトも慰めたし、フェイトは
攻略しただろう。

なのはとフェイトの友達になるシーンには呼ばれなかった。何故だ
ろう？

半年後に起きた“闇の書事件”。

いきなり襲い掛かるヴィータをなのはから追い払い、フラグを立てたつもりだ。これでなのはも半分攻略。

ちゃんとヴィータに頼んで魔力を持っていかせた。俺の魔力あげたら大変だからあげなかったけど。

そしてラストの防衛プログラム。

「いくぞ、コルセット」

【了解】

「ウリヤアアアッ！」

こんな感じで防衛プログラムを消し飛ばしてやった。

リインフォースとの別れのときには呼ばれなかった。何故だろうか？どうやら別れには縁がないらしい。

なのはが墜ちたときも毎日病室に顔を出したから、多分フラグを立っただけだ。

最近、転校生がやけになのは達と話している気がする。

なのは達に「無視しろ」と言っても、「可哀想だから」と言って逆に無視された。

俺のハーレムに手を出すとは良い度胸だ。

今度一発言い聞かせてやらなければ！

Life・16 ゲームとかがないときの暇潰しはしりとりが定番

「この厄日がこんなに早く来るとは思わなかったよ……鬱だ死のう」

「いちいち言わないの。どうせ私達も恥ずかしい格好で出なきゃいけないんだから」

共に仕事をこなしているテストロッサさんに諭された。

今の仕事は必要機材を教室に運ぶだけの肉体労働。

「今日が準備日とか明日は死亡フラグ乱立確定。」

明日サボるか」

「サボりはいけませんっ！」

朝から怒鳴るな。耳がキーンとするから。

そしてお玉で叩くな。痛いから。お前はリリースさんか。同じ金髪だし、兄貴いるらしいし。

てか喫茶店に何故お玉？

「つかメニュー考えてあんの？」

「あると思うけど……」

ならば死亡フラグ回避に勤しむかね。

「てなわけで厨房に回らせてもらおうか」

「却下」

何故。

「ウェイターいなくなるし」

「オレ以外を使えば良いかと」

最近のレストランやらカフェにも男のウェイターいるだろ

「却下、可愛いウェイターなら人気とれるでしょ？」

「ならウェイター減らせ」

人件費出来るだけカット。

コレ人類の常識。

「却下、これでギリギリなのよ」

「せめて女装はやめれ。オレが死ぬ」

羞恥刑とかオレの精神がマッハ。

「却下」

「鬱だ死のう」

「ふー、良い湯だった」

本日は泊まり込みらしい。

風呂は学校が用意してくれるし、メシも学校が用意してくれる。

まさか風呂が室内プールだとは誰も思っまい。

温度も40度ほどだし、シャワーとサウナ付き。リッチなプールである。

「8時か……」

確か10時消灯だったな。

「……明日アルマゲドン起きるよ」

羞恥刑で死ぬならいつそ地球ごと滅んでしまえ。

「ただいま戻りましたー」

「丁度良いわ！あなた、ポスター製作に回って！」

「……あ？」

「ポスターか」

「何書けば良いかな……？」

「知らね」

ポスター製作は3人1組で分散してやることになった。
午前世話になったテストロッサさん。

よく騒ぐオレンジ。

そしてオレ。

謎の組み合わせだ。

オレンジが騒がずサボりもせずやっていたことに驚きである。

「てけとーにあいであぶりーず」

「真面目にやれや」

「オレは真面目だコラ」

「ま、まあまあ……」

オレンジ、何もわからんくせに言っでない。

「今日は長くなりそうね……」

アリサさんが誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いたのを、オレは知っている。

「おわらぬええええっ！」

「消灯時間も迫ってるわ。

皆、そろそろあがってね。今日はお疲れ様。

私達も今日はそろそろあがって、明日朝早くからやらなきゃ」

「そうだね……」

「間に合うのかな？」

「……さあ？」

先にあがった高町さんと八神さんとずかさんが会話しているのを聞いた。

確かに間に合わなさそうだと思う。

看板製作が思った以上に進まない。

店の彩飾もまだ不完全。

調理場の準備が終了にほど遠い。

これでは流石に終わらないと見るのが普通。

女装させられる身としては実に微笑ましいことで「なんだっ

て？」訂正、誠に遺憾である。

だから高町さん、アイアンクローはやめれ。

「早く手を動かさないなの」

「イエスマムっ！」

その日、消灯までに準備は終わらなかった。

「良い汗かいた〜」

【お疲れ様】

鞆に納められたウォラスを腰に差して廊下を歩く。

なるほど、深夜0時になると流石に見回りの先生や風紀委員もいなくなるか。

「どのクラスも良くできてるよなあ……」

【見て見て、このアニメキャラクターの絵とかそっくりじゃない】

「この宣伝用ポスターの出来もヤバイ。どれくらいヤバいかというとスゲーヤバイ。

ドイツもコイツも文化祭という学生の一大イベントに力を込めすぎてる件」

【そんなことしたら潰れちゃうわ】

「……リンゴじゃないぞ、文化祭は」

実際の所、潰れてほしい。女装なんて御免被りたい所存。

「そしてウチのクラスはっ……」

【残念すぎるわね、周りが終わってるのに1つだけ終わってないってのは】

「どうせ女装させられるのが目に見えてるのに今から準備し始めるとか自殺行為。死んでもやらない」

【今から準備し始める↓朝になる↓みんなが来る↓頑張った証を見る↓超疲れたフリをする↓明日の仕事免除↓女装しない↓死亡フラゲ回避】

その発想はなかった。

【そろそろ5時よ】

「朝日がテララブシス」

朝日が登り始める午前5時。

「ムスカ」

【カリオストロ】

「ロムスカ・パロ・ウル・ラピュタ」

【タイニータイガー】

しりとりしながら作業を進める。暇人はコレだから。

「ガブラス」

【スパイダーマッ！】

「それアウトじゃね?」

【いや、まだからセーフよ】

「いや明らかに【マ、よね?違うといったらこの辺り一体を焼け野原に……】チツ、仕方ない……摩訶不思議アドベンチャー」

汚いでござる。

【それ言った】

「マスクドデデデ」

【デデデ大王】

永遠と続きそうでこわい。
暇人はコレだから。

「誰かいるの?」

「の、の……ノースリーブ」

【“の”じゃなくて“う”よ】

「あらっ?」

「ってあんたたち何してんのよ……」

アリサさんとすずかさんだった。

「徹夜で準備」

「明らかしりとりしてたわね」

やかましい小娘ぢゃ。

【“う”ならばウォラスで良いではないか】

ハイ採用。

【デймロスっ！助言しちゃダメでしょっ！？】

「つかデймロスって誰」

「【……はあ？】」

「で、あの時手に入れた剣がデймロスなのよ」

「へっ」

そいつは知らなかった。

しかもデймロスが아트ワイトって人と恋仲であつたらしい。くつつくかくつつかないかなりヤキモキしていたが、結構イイ感じだったとか。

「てか아트ワイトって何ぞ」

「『【……えっ？】』」

「解せぬ」

1人ぼそりと呟いた。
明らかにオレである。

結局、いかにも有無を言わさん形相で詰め寄ってきたアリサさんの
ストレート勝ちだった。

鬱だ、死のう。

で、和服を着てウェイトレスをさせられることに。

他はみんな洋風なチョイスなのに何て仕打ち。

目から汗が出そうになったとです。

「お待たせしました、イチゴショートです」

喫茶店に和服をチョイスするとはどういう神経だろうか。

なんか、オレだけ1人浮いてるみたいな。

目から汗が出そうになったとです。

「ねえ彼女お」

すぐ後ろの席か。

「お客様、どうかなさいましたか？」

「この後暇あ？暇だろお？俺達と一緒にまわらねえかあ？」

【人気ね、あなた】

いないでござる。

「この後も仕事d……ですから。悪いk……ですが、お断りd……します」

しかも若干片言。なんぞコレ。

「いーじゃねえかよお！俺達と仕事とどっちの方が大切なんだよお！」

仕事です（キリッ

なんてことは言えないので黙り。

「あんだあ？俺達と一緒にまわれねえってかあ？ああ！？」

「おいテメー！俺のガラスのハートに傷がついちゃっただろお！？どう責任取ってくれんだ？ああ！？」

知りません（キリッ

「んだとおっ！？」

見るからに痛々しいヤツらである。

「お客様、しつこい男は男からも女からも嫌われると言います。ご自重ください」

「テメー、言わせておけば「お客様？」なっ!？」

「周りのお客様のご迷惑となるのでご退場願います」

「アリサさん……」

だったら女装やめれ。

「却下」

鬱だ死のう。

【人生楽あれば苦もあるのよ】

お前黄門様いつ見た。

【一昨日OPだけ見たわ】

ちゃんと内容見なさい。

このハンコ入れが目に入らぬかゝってね。

【確か印籠じゃなかったかしら】

ハンコ入れも印籠も変わらないだろ。

「メイクさんのメイク技術に脱帽。
男を女にさせる力を持つとか危険。」

屋上という暇の二文字で済む場所で午後も明日も逃げたいとです」

二度と女装しないと誓った瞬間である。

「秀司」

オワタ。

「いたいた、そんなところで何してるの？」

「男の面目を潰されて傷ついたオレの心を癒してる」

テストロッサさんがオレの横に座る。

うん、和む。癒される。

「この展開が明日まで続けばイイノニナー」

「残念だけど、明日は1日中仕事だよ」

なん……だと……！？

「あの、わ、私も午前で終わりで午後も暇だから、その……一緒に回らない？」

（。 ㇏ ; ; ）

「ど、どうかな？」

「喜んで」

上目遣いですかコノヤロー。反則すぎる。

お陰で鼻から鉄分豊富なイチゴシロップが垂れ流しである。

「焼きそばウマー」

こういう時の焼きそばって地味にうまいんだよな。

これ野菜に火が余り通ってなかったけど。

こういうのはちゃんとやらないと美味しさに欠くことが多い。

お隣のテストロッサさんはメロンパンか。

一口食べると余りのうまさにテストロッサさんが悶え始める光景が見れる。

お陰でさっきからイチゴシロップが垂れ流しである。今にも萌え死にそう。

「てかそれどこで買ったよ」

「え？購買だけど……」

購買？そんなもんあったっけか……？

「……なくね？」

「あるよっ！」

怒鳴られましたー。

「3時か……」

「何か用事でもあった？」

「いや、ない」

その後、購買に連れてかされた。

おばちゃんとも知り合った。

途中で学生食堂も見つけた。

今までのバナナやらキュウリやらだけ生活はなんだったんだろうと思ひ知らされた瞬間である。

「ちょっと、ついてきてほしい所があるんだ。ついてきて、くれるかな？」

「いいともー！」

体育館裏に連れてこられたオレは早速歪な電波を拾った。

この展開はコクられて押し倒してそのまま……。

いや、この展開だったなら悩みを打ち明けてきてオレが解決したらコクられて押し倒してそのまま……。

いやいや、この展開なら実はもう1人女がいて「どっちが好きなの!？」みたいな展開になったからどっちも押し倒して……。

おいそこの隠れて見てる人類、むやみやたらと電波送信しまくるんじゃない。

面子は割れてるから後で説教でもしてやらう。

「ここら辺で良いかな……」

なにがよ？

「あのね……剣の稽古でもつけてもらいたいんだ」

ああ、なるほど。ついにオレの魅力にk……なんだって？

「都合の良いときで良いからつけてくれないかな？」

「何故にオレ？八神先生だっているだろ？」

あー、でもあのきよにう魔人なら渋そうだから「剣が当たるところまで近づいて斬れ」としか言わなさそうだな、うん。

「シグナム……じゃなくて八神先生だって忙しいだろうから……ね？」

ね？じゃない。

「解せぬ」

今日は休みだったハズ。一体誰がこんなことを……。

【人手不足なのよ、我慢しなさい】

昨日着ていた異様に露出度が高いメイド服に着替えている。

露出度は……まあ、皆さんのご想像にお任せしよう。てか言いたくない。

誰かとチェンジを要求する。

「修司君、今日はこの服でお願いな〜」

勢いよく八神さんが更衣室の扉を開けてズカズカと上がり込んでくる。デリカシーの欠片もないとは正にこのことか。

てか今更チェンジとはこれはいかに。

「人じゃなくて服をチェンジしてどうする」

「良いからはよ着替えるんや。写真撮影するから——グヘヘ」

あまりに酷い歪み具合に全オレが泣いた。

「いらっしやいませー」

「以上でご注文はよろしいでしょうか？」

「ありがとうございますー」

これは全部オレが言っているのだ。

今日のコスチュームは女剣士。若干長い髪は後ろで束ねておいた。鬱陶しいから。今の髪型を言うならば簡単に言つと、ポニーテールだ。

露出度は昨日より高いらしい。最高ランクだとか。オレに死ねと申すか。

【愚痴ってないでやりなさい！あともうちよつとのところなんだからー！】

黙れ修造。

腰に差している剣はウォラス。見事なまでに熱い。

おい、ここは-10 じゃないしシジミも取れないぞ。

つかどうやってその手の物仕入れてんだこの剣。

【あなたのPCにコアクリスタルから電波を出して乗っ取ってからコアクリスタル内に動画や音楽を保存してるのよ】

「え、さりげなく凄い事言つたよね今」

「はあ？何が？」

「あ、すみません」

【他のソーディアンには出来ない代物よ】

無駄な機能だけだな。

【それは言うてはいけないお約束よ。あ、お客様が来たわ】

「いらっしやい……」

「お、いいお店だね」

「ませ……？」

見知った顔が大量に出てきた。

体育科の八神先生、保健室のシャマル先生、高町家の皆さん、前にアースラとかいう所で取り調べした時にいたリンディ、知らん顔の人、そしてロディ姉。曲者勢揃いである。

「あ、席へご案内致します。こちらへ」

今にも死にそうである。

「大変だよオイ……」

裏方では緊急の会議が執り行われている。

参加者は高町さん、テストロッサさん、八神さん。とオレ。

「これは一大事だね……」

「……どうする？」

「……降参や」

いやいや早すぎるから。諦めんの早すぎるから。

【諦めんなお前！】

余計な茶々を入れんでいい。つか入れんな。

「確かここら辺に正露丸が……」

「「「正露丸っ！？」「」」

飲まないと胃が風通し良くなっちまうからな。

「まさか……こういう事態を事前に予期していた……？」

女装してるときに正体バレてとやかく言われたときの対策なんです
が……。

「とにかく、胃の安全を確保しなきゃね……」

「正露丸を奪取するんやっ！」

3人が襲いかかる。

うん、殺気のこもった修羅の目だ。

「あーうん、正露丸あるから。“3人分”。」

「“3人分”？」」

地雷踏んだかね。

今ほどの気迫は近年でも稀に見ないし。

「わ、私は嫌だよ!？」

フェイトちゃんやはやてちゃんが胃に穴が開いちゃうなんて!」

「私も嫌だよ!2人の胃に穴が空いてほしくない!」

「私も嫌や!大切な友達の胃に穴が空くの、見ていられんわ!」

「私は大丈夫だから2人共飲んで!」

「いや、そこは2人が!」

「何言つとるんや!そういう2人が飲めば良いんや!」

【修羅場k t k r w w w】

こんなところで言い争うなや。

そしてウォラスは黙ってなさい。

「こんな時こそ男が譲るべき。てなわけで、はい」

これで、良いんだ……。

「5番テーブルにイチゴシヨートと紅茶、10ずつ運んで」

「把握」

そう言うと、立ち上がって仕事に向かった。

「「修司（君）エ……」」

何か聞こえた気がしたが幻聴。

「非常に泣きたくなつたです」

【はいはい、女装してるのがバレたから悲観的になるのはわかってるけどさ、まだ仕事もあるからちゃんとやりなさいね】

鬱だ死のう。

「7番テーブルにレアチーズケーキ1つ運んで」

動く気すら起きない。

渋々立ち上がると、キヤー、という叫び声が外から聞こえてきた。

「どうせガラスかなんか割つたんだろう？」

【いや、違つみたいよ】

……はあ？

近くの窓から外を見下ろすと、地獄が広がっていた。

逃げ惑う人々。

追ってくる白い何か。

破壊される屋台。

「なんだよ、これ……」

【私の世界の魔物ね。コイツはケイブクイーンよ】

「行くぞ、ウォラス」

【わかってるわよ】

オレは再び3階の窓から飛び降りた。

Life・19 戦闘中に長々とモノローグは語るな

「解せぬ」

【3話連続で始まりの一言が「解せぬ」ってwww】

いや、でも解せぬもんは解せないんだよな。てか何でオレって戦う運命にあるの？

【マーテルとかいう奴に頼まれたんでしょ？年増しババア潰してくれって】

確かにそうだけどさ……。

「でもこれって年増しババアと関連性あんの？」

【知らねーよ】

「ぬうおるりいやあっ！」

「UOOOON！」

【バーストライクっ！】

堅っ！斬れないとかありえねえ。

さっきから斬ってカウンターで晶術されてそれを晶術で相殺しての無限ループのように見えるが気のせい。

てかバーンストライクしかやってくれないのね、ウォラスさん。

【クラッシュガストオっ！】

弱点ついてんのコイツ？全然効いてないし……。

「斬りづらいつたらありやしない。」

ロディ姉とアリサさんも同時に出てきた雑魚モンスターを掃討しに向かっている1人。どちらかとチェンジを要求する。

【今更遅いわよ】

ですよねー。

「つか晶術怖っ！当たったら即死じゃなかるっか」

【ちゃんとHP見とけば大丈夫よ。

コイツの晶術は全部下級と中級で構成されてるから、一気に致死量受けるなんてことないから】

いや、普通にあるよ？

当たったら痛いだろうし、痛い嫌いだから致死量受ける前に死ぬはず。

そもそも回復役が時点で負けが見えそうです。

【ディバインセイバーっ！】

前言撤回、回復役がいなくても無双は出来るようです。

【ばてた〜】

「剣がそれ言うか」

取り敢えず働け。後で休ませてやるから。

【ゴッドブレスっ！】

直撃。

当てるのがプロすぎに見えたのは気のせい。

「斬れないとかがありえねえ。

剣や元の人格が優れていて性能が良くても今のマスターの性能が全ステータス糞すぎるとかマジありえねえ」

このデカブツ斬れないし。

もーやんなっちゃうわよねーおくさん。

【スペックとかステータスとかはかなり未熟だけど今までのマスターよりはマシよ。

確かにそいつらはあなたよりは強かったし、才能も満ち溢れていたけど、どのマスターもその力に溺れて死んでいったのよ】

あ、それ長くなるなら後にしてくれる？今戦闘中だから。

「てか戦闘中勝手に長々モノログ語ってんじゃねーよ。死んだらどうする」

【別のマスターに乗り換える。

ディムロスのマスターのあの子とかいいかも】

あの……発言がドライすぎませんか？

さっきまで今までのマスターよりはマシって言ってたのは嘘なんですよ
すねわかります。

「てかいい加減、沈めエエエエエ！」

渾身の一撃……だったはず。

一撃で出っ張ってる頭(?)を斬り落とした。

よし、絶命してるな……。

「ばてた〜」

【知らんがな】

ですよー。

ウォラスを鞘に仕舞おうとしたときだった。

「はあああああっ！」

「うゝおっ!？」

目の前から現れた何かに斬りつけられそうになった。
ウォラスで上手く弾いて距離をとる。

「今までの町破壊の原因は、修司だったんだね……」

「テストロッサさん、高町さん……」

凄じ誤解してるよアナタ。

「1つ言わせてくれ。」

それでもオレはやってない」

「嘘をついても何の得にもならないよ」

いや、嘘じゃないし。

信頼ってというのは信じなきゃ生まれないんだよ。

「時空管理局武装隊戦技教導官、高町なのはです」

「同じく時空管理局本局執務官、フェイト・T・ハラオウンです。
武装を解除して、こちらに」

「なんだって？」

「武装を解除して」

だつて。どする？

【好きにすれば？】

「じゃあ、やってみますかね」
ウォラスを構えた。

「邪魔すんなよ」

【しねーよ】

じゃ、始めようか。

オープン・ザ・

【セサミ】

「セリフ取るなや」

L i f e ・ 2 0 先攻1ターンキルは邪道

ピンクの球体がいくつも現れてオレに撃ってくる。

【ピンク玉って……カービィじゃね？】

おまえは黙ってれ。

「てか速い速い速い、ちょ、速いって」

もうオレの所に来た。

様子を表そうとすると、A4のレポート用紙が1枚もいない。

「せいっ！」

次々に来るカービィ（笑）を斬り捨てて高町さんに近づく。

「そい「はあっ！」ウボアー」

背後から来るとは……卑怯なりテストロッサさん。

【修行が足りないわね】

「るせーんだよ」

そう言っと、オレは夢に落ちた。

“次元航行艦船アースラ”

その一室で、話が繰り広げられていた。

「で、ウォラスは？」

「ディムロスも返してください！」

「私のドラグノフも！」

「正座で言っても迫力に欠けるんだが……」

相手はクロノ・ハラウン執務官。

道中で聞いた噂によると、提督への昇格が持ちかけられているらしい。

「さて、ここからが本題だ。

君たちの剣はロストログアと認定された。よって、管理局が封印処理後に回収保護する」

「そしたら……」

「所有権を管理局に全権を委任することになる」

うあああういえぬえええっ！

てかそのロスなんとかつてのなによ。

そんな疑問を抱いた瞬間だった。

「ふざけないでよっ！」

いきなり怒鳴りだしたのはロディ姉だった。

「ロストログアというのがどういうものか知らないけど、人のものを取るのは窃盗じゃない！」

ふむ、確かにそうだな。

管理局って所は法律完全無視ってか。無法地帯ってか。

「そうですよ。」

クロノさん、許可なく人のものを取るのは犯罪ですよ？」

今だけかなり獰猛なアリサさんが良い感じにおとなしかったのは言うまでもないはず。

「しかも、盗っていったのは地球。

詳しく言えば日本の海鳴市の学校だ。

日本でやった犯罪は日本の法に従うべきじゃないのか？」

あれ、いつの間にかスピノフしてる。

「何とでも言え！君たちの返してほしいものは帰ってこないが」

ならばこつするまで。

「おいお前」

「なんだ」

「デュエルしろよ」

3人がずつこけたのは気のせい。
てかこんなネタ振りですつこけるな恥ずかしい。

「くっ、何で僕がこんな目に……」

「先攻どーぞ」

「いくぞ、デュランダル」

【OK Boss】

ドロー位しろよ。

しかもなによその装備魔法。見たことないし。
つかカードの模様違わね？

【E t e r n a l C o f i n】

オワタ。

「デュエルしたくらいでこの扱いは酷いと思うんだ」

ちゃんとルールは守ってやれよ。

やはり先攻でワンキルはないだろ。

「大丈夫？」

「指先凍ってて大丈夫とか頭おかしいだろ」

ちょ、悪かったから冷水に変えないで冷たいから。

とりあえず今北産業で現状を説明すると、

ルール完全無視されて敗北。

ダイレクトアタックの追加効果で凍る。

気づいたら高町さんに溶かしてもらってた↑今ここ

といったところである。

「なるほど、さっぱりわからないよ」

だから冷水に変えないでって言うてるだろ？死んだらどうする。

「……骨は拾うよ」

「その間は何」

ともかく、無事で何よりである。

【本当、呆れたマスターね】

「あ？」

いたのか。知らなかった。

【しかし、アンタって便りにならないのね】

「そんなのは周知の事実」

「あの……誰と話してるの？」

この剣だけど。

「遂に頭が……」

いやイツてないから。正常だから。

【あ、言い忘れてたけどマスターの素質がない人間には私の声聞こえないんだよねー】

「それを早く言わんかい」

「え？何を？」

アンタじゃねえよ。

「で、いつ帰ってきた」

【アンタが凍ってから1時間くらい後ね。

ロディが頑張ってくれたから一時的に帰ってきた】

一時的ってなんぞ。

【話を聞いてから決めるってさ。緑髪の人が言ってた】

「納得」

取り敢えず凍ってるの溶かしてからだ。話はそれから。

「カツ丼出ませんか」

「出ません」

やはりか。残念。

「その剣で何をしようとしているのですか？」

リンディさんが尋ねてくる。

「日本語でおk」

【そのままの意味でしょ？

私達が今何をしてるか言えば良いんじゃない？

つか何でわからない】

この剣がエキスパート翻訳より使えるのがわかった瞬間である。

「↓雨とかいうヤツが世界滅ぼそうとしてる↓何故かオレが選ばれる↓雨探し中」

オレの周りにいた見知った連中もそうでないヤツも驚きを隠せていない。

世界規模でモノ言ってるので無理もないだろう。

【エルレインじゃね？】

細けーよ。

「その雨というのは私は知らないのですが……」

シャマル先生が口を開いた。

そうか、エルレイン知らんか。

「本局のデータベースと照合しましたが、存在しませんでした」

「誰だおめえ」

「エイミィ・リミエツタって言いまーす」

「どこから湧いてきた」

「さっきトイレから出てきたばっかなんだけど」

なにそれこわい。

「そんなことより話を進めましょう。クロノ」

「はい艦長」

黒いトゲを肩から生やした男が立ち上がる。

「ロストロギア“ソーディアン”の危険性を説明します。
ソーディアンとは……」

話が長そうである。

てか床が光っててテラマブシス。下向けねえ。

「以上です」

「どうですか……？」

「Z Z Z……」

「ちよつとアンタ、起きなさいよ」

あ、終わった？

「寝てたのか！？」

だって長そうだったし。

長話苦手なんだよね。難しそうだし。

「取り敢えずあれでしょ？危ないんでしょ？」

「まあそうだが……」

大まかな流れを掴めてればこーいう話はおkなんだよ。

……あら？警報？

「艦長！艦内にモンスターが侵入しました！」

「艦内に警戒体制！武装局員は直ちに出勤！」

「「「はい！」」」

「全く、今週に入って三回目ね……」

「そんなにあったのか。」

「警備ザルじゃないか。」

「そんな警備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「話を通じたようである。」

「きつと大丈夫じゃない感じが否めないのも気のせい。」

「で、どこから湧いてきてるんですか？」

「今日は……この辺りね」

「高町さんやテストロッサさん、八神さんが次々と部屋を後にする。」

「艦尾か。」

「取り敢えず帰っていいですか。危なそうなんで。」

「【ちょっと！私を置いていかないでよ！】」

「怒るなよ。」

「怒りすぎるとハゲるぜ？」

「【剣だからハゲる心配がない】」

じゃあサビる方向で。

「この子達に行かせましょう」

「オレ達を行かせるとか正気の沙汰じゃない」

「私はいいですけど……」

「私も、アリサちゃんと同じかなあ」

オレが1人だけ浮わついているのは何故。
ともかくやれと。

「剣は一旦お返します。」

それで本格的に返すか検討します」

だとき。

【早く行けえっ！もたつくんじゃねえ！】

何かテンションがおかしいとです。

Life・21 イジメはよくない！

【ちゃんと斬りなさいよ】

「全然斬れない罫」

モンスターに傷どころかダメージすら入らないとです。
ゲーム的に言うと、レジストされてる。

【オイオイ、しっかりしなさいよマスターさん】

そんなこと言われても。

てか何で2人とも術なしなのにそんなに早く潰せるんだよ。

【知らんがな】

お前には聞いとらん。

結局、オレは誰も倒せずじまいだった。

「お疲れ様。

戦いの様子は見させてもらいました」

「結果、

アリサ・バニングスとロンドリーネ・E・エツフェンベルグは今回の襲撃に関することを協力する事で剣は返すという方針だ」

あれ、オレは？

「いるわけないだろう？一匹も潰せてないんだから」

デスヨネー。

「マスターの方もそこまで危険じゃないからな。
下手なことに使わない限り大丈夫だろう」

あ、そうですか。

手離さなくてもおk？

「ああ、返す。」

しかし、僕たちの管理下にいろよ？何かあったときに間に合わないからな」

把握。

「そこの2人はどうですか？」

「「やります！」「」

即答かよ。

ロディ姉バイトどうすんのよ。

「両立するっきゃないっしょ」
「」

「それでいいのか管理局」

「問題ない」

いいのかよ。

「ただし笹原修司、君はダメだ」

「何そのボーボボの漬け物ポジション」

もつと高待遇を要求する。

「君では足手まといだ。

この件から手を退けとは言わないが、君が戦って勝てる相手ではない」

「私は捜査には関わらない事を勧めます」

「使えないからってオレだけその扱いは酷いと思うんだ」

イジメはよくない。

「……まあ、良いでしょう」

Y A T T A I !

「しかし、ノルマを達成しなければ即刻リストラだからな」

「上げて落とすとかなにその鬼畜プレイ」

ハラオウン家が鬼畜と知った瞬間である。

「取り敢えずお疲れ様。」

今日は解散にしましょ」

さらば鬼畜家族。

出来れば会いたくない。

てかどうやったらそんなにウマが合うんだよ。

「念話だ。

魔力さえあれば使える」

成る程、電話か。

でも受話器が見当たらなかったんだが。

「つかどうやって帰るよ」

【知らんがな】

最近コイツが【知らんがな】しか言わなくなった気がするのは気のせい。

解散してすぐに別れたら帰り方がわからなくなった罫。

もう迷子の歳ではないはず。何としてでも出たい。

「こんな所でのたれ死んで堪るかっ！

オレは絶対に帰るっ！」

「いた！」

何がよ。

「修司、探したよ」

振り返ると、金髪の天使がいた。

コイツは神がくれた救いの手。掴まざるを得ない。

「テストロッサさん、出口まで案な「ちょっと聞きたい事があるんだ」おく、どんな話？」

すると、いきなり腕を掴み走りだした！

「剣を教えてもらうがてら模擬戦しよう！」

「オワタ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9548w/>

リリカルマジカルなんだってエーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

2011年12月3日22時48分発行